
電腦世界のPとV

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳世界のPとV

【Nコード】

N05760

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

色々な方面から影響を受けて書き始めたちよっと変わったオンラインゲーム小説だと思っていただければ。

第一章（前書き）

ここで書く事でもないかもしれませんが『反転・遊戯・リバーズ・ゲーム』は作者の不注意でデータを消失してしまった為に続編の投稿は未定になってしまいました。大変申し訳ありません。

第一章

「ふう」

襲い掛かってきた化け物どもを粗方片付けて俺はやっと一息ついた。

転がっている化け物は様々でトカゲの化け物や熊のような化け物だった。この階層にしては手強い類の敵だった。

それを一人で片付けた俺は使っていた剣を背中に背負っていた鞘に収めて座り込んで休憩をとることにした。

その昔、地球という名の惑星に人間が住んでいた。

しかし度重なる人間の身勝手な行動に地球の環境が先に限界を迎え、地球という惑星は人間　　というか生物が住める場所ではなくなっていた。

そこで提案されたのが当時最先端の娯楽として開発されていた電脳世界への移住だった。

人間という個人を粒子レベルにまで分解し、その情報に変換して電脳世界へ取り込もうという取り組みだった。

当初は地球外脱出計画が立案されたのだが、それは色々な条件をクリア出来なかったので没とされた。

没にされた理由は全人類を安全に地球外へ脱出させるほどの宇宙船の製作が不可能だったという事。それに伴い宇宙船の製作による地球の資材を確保した場合、地球の再生が不可能になるという事実があったから。

その為セカンドプランであった電脳世界への移住が決定された。

電脳世界へ赴くのは地球上の全ての人類だった。

その理由は地球の再生にもっとも適切なのが 地球上から人間が居なくなる事だったからだ。

しかし電脳世界へ入ってからも 否、入る前から人間の業という奴は罪深かった。

不死属性付与。

要するに電脳世界に入る前に権力のある人間は電脳世界における不死を設定に組み込ませて有利を謀ろうとした。

勿論、電脳世界に入った最初の人類 俗に第一世代と呼ばれる全ての人々が不死になったわけではない。あくまで一部、全体からみれば1%にも満たない権力者のみである。

しかし彼らが有利で居られたのは最初の10年までだった。

電脳世界とはいえ人間が生きていく為には衣食住を用意する必要がある。その内、衣と住に関しては電脳世界であるためデータをいじれば問題なかったのだが問題になったのは食だった。

電脳世界とはいえ何かを食べるといことは何かを消費するということだ。

食とはいえ唯のデータ、されどデータだった。

何十億という人間が食事というデータを食べ排泄し、それを更に変換する。唯それだけの事だが電脳世界を管理する為に作られた高度な人工知能にとっても恐ろしく負担が大きかった。

その為、電脳世界を管理する人工知能は10年を越えた時点である決定を下した。

どんなに優秀な人工知能であっても数十億という人間全てを管理する事は不可能だ。だから人工知能は多すぎる人間を 間引くことにした。

その方法は様々だが、もっとも効率的に間引かれた方法は食料の制限だった。

今まで人数分あった食料が突然半分にされた。つまり二人に一人しか食事が取れない。電脳世界である以上、食という欲求はあって

も餓死という概念はない。つまり食べなくとも死ぬことは無い訳だが食という人間にとつて最高に近い娯楽だったものを取り上げられた彼らの反応は劇的だった。

はつきり言つてしまえば戦争になった。

食料を手に入れるという欲求の為に人間たちは殺しあつた。

電脳世界であつても死という概念は覆せない。一度死んだ人間を元のとおりデータを整えても意識を取り戻すことなく死は死のまま決して生き返ることは無い。

そして、その過酷な状況の中で一番割り食つたのが不死になつた一部の権力者たちだった。

まず食料を半分にされたとはいえ相手は人工知能だ。権限を持つ権力者のアクセスコードを持つてすれば強制的に元に戻すことも出来るはずだった。

アクセスする為の端末データ装置の下に辿り着けさえすれば。

人工知能は自分にアクセスする為の端末データ装置のある地下階層の最下層へと隠してしまつた。

それは元は娯楽として作られた電脳世界のゲームダンジョンとしての名残だった訳だが効果は靦面だった。

なんといつてもそのダンジョンには大量のモンスターが設置されていて普通に進むことを妨害してくる。

そこで白羽の矢がたつたのが不死属性をもつた権力者達だった。なんといつても彼らは死なない。

例えどのように過酷な状況に追い込まれようと彼らは死ぬことが無い。だから死なない彼らがダンジョンへと挑戦することを強制された。数という暴力によつて。

しかしダンジョンの攻略は不死者達の全滅という形で終わりを迎えることになる。

100層あるといわれるダンジョンの3層。わずか3層にて不死者殺しのモンスターが配置されていた為だった。

そのモンスターは通常の間人に対しては無効だが不死属性を持つ

ものに対しては天敵として電脳世界に君臨していた。

結果、ダンジョンの攻略は中断され電脳世界の中では不毛な戦争が繰り返されることになった。

当初数十億居た人間はたちまち半分になり、そこから更に半分になり、そこからまた半分になって　気が付けば人間の数は数万程度まで減らされていた。

電脳世界を管理する人口知能としても、ここまで減らすつもりは無かったのだろうが一度始めた戦争は取り返しが付かなくなり、人工知能の理解を超えて人間は殺し合いを続けてしまったのだ。

そうして時に争い、時に平和に過ごしていた電脳世界の住人達に転機が訪れたのは第一世代から発足して六番目の第六世代達が主として活動していた時期　人間が電脳世界に移住して150年ほどが過ぎた時だった。

唐突に、本当に唐突に電脳世界中に一つのアナウンスが流れた。それは荒廃していた地球という惑星が人間にとって移住可能なレベルにまで再生されたという知らせだった。

人々は勿論、喜んだ。
しかし同時に絶望した。

確かに地球という惑星は再生されたのかもしれないが彼らには電脳世界から外へ脱出する為の手段がなかったのだ。

無論、当初の予定では地球が再生したら電脳世界から表へ出られるようにプログラムされていたのだが予想外の変更　つまり100の階層を持つダンジョンの奥深くへ端末データ装置を設置されてしまった為に誰にも端末にアクセスして外へ出るコードを入力する事が出来なくなってしまっていた。

人々は人口知能による電脳世界からの解放を待ち望んだがアナウンス以降の連絡はなく　その10年後から人々の自力によるダンジョン攻略が開始された。

当初ダンジョンを攻略するにあたって解放軍という物が有志を募

って組織された。

その数、約千人。

電脳世界の中でも腕自慢の者や器用さに自信のあるものなどが集められたのだがダンジョンの中においてその技能は全くと言って良いほど役に立たなかった。

ダンジョンが人々の予想を超えて過酷だったのではなく無情なほどに平等だった為だった。

通常、電脳世界での生活は人々が地球で暮らしていた物と大差はない。電脳世界故の特異性はいくつかあるものの、体の大きなものは力が強かったり逆に小さい者でも素早く動けたりと見た目通りの身体能力が現れる。

しかしダンジョンに挑戦した解放軍千人は第一層に入るなり皆一様にレベル1というステータスを強制された。

ダンジョンの外でどれだけ力自慢であったとしてもレベル1仕様のステータスを適応される為、雑魚モンスターでさえ一撃で倒せないという情けなさ。

そう。ダンジョンの外と中では全くの別世界だった。

逆に言うとダンジョンの外でどれだけ非力だろうとダンジョン内でレベルを上げれば見た目に反映される事無く力がドンドン上がっていくし素早く動けたりもする。

しかしダンジョンの中でどれだけ強くなろうとダンジョンから一歩でも外に出してしまえばダンジョン内のステータスは一切適応されず非力な一般人に逆戻りする。

解放軍がその仕様に慣れるまでの間に50名もの死者を出す事になった。

それでも解放軍は当時まだ順調だった。

何人かの犠牲者が出たとはいえ順調にレベルを上げ階層を進めていき1層から4層までを難なくクリアして見せた。

そして迎えた5層において解放軍最初にして最大の壁に衝突した。1層から4層までと違って5層 正確には5の倍数の階層には、

その下の階層へ続くゲートを護るガーディアンが存在した。言ってしまうえばボスの部屋だ。

解放軍が5層のガーディアンを撃破する為に払った犠牲は200名。

あまりにも多すぎる犠牲者だった。

それに伴い解放軍はダンジョンの攻略に関して恐ろしく慎重に行動する指針が出来てしまった。

どのくらい慎重になったのかというと1層から5層までの攻略期間が2週間だった事に対して6層から10層までの攻略に2年という歳月をかけた。

無論、電脳世界に暮らす人々からは不満が漏れた。

有志で募ったとはいえ彼らの生活は一般の人々が支えている。ダンジョンを攻略する解放軍の為に一般的に暮らす人々は税金のように彼らに物資を提供する事を義務化されていたのだが、その解放軍のあまりの攻略速度に不満が漏れるのは当然だった。

しかし『だったらお前がやれ』と言われてしまえば一般人は黙るしかなく、それが逆に解放軍に強い権力を与える引き金になってしまった。

それに拍車をかけ解放軍のダンジョン攻略は階を進むことに遅くなる。

結果、全100層の内30層まで攻略するのに30年以上の年月を費やしてしまった。

そこで業を煮やし立ち上がった人々が居た。

解放軍とは違い自主的にダンジョンを攻略する人々 通称、騎士団が結成された。

解放軍とは違い騎士団の行動は迅速の一言に尽きた。

階層に残るモンスター達を倒してレベルを上げ、次々と階層を攻略していき僅か5年の歳月で解放軍の攻略層に追いつき そのまま追い越した。

騎士団の怒涛の快進撃は続き、35層、40層といった階層を解

放軍抜きで攻略していった。

そんな中、騎士団に触発されてダンジョンを攻略し始めたもう一つのグループが発足された。彼らは特に固有の名前を付けられはしなかったが極少数。二人から五人という人数で攻略に当たり効率優先で攻略をする者。パーティプレイヤーが誕生した。

その中で更に稀な存在。

誰とも組む事無く単独でダンジョンを攻略していく者もあらわれる。彼らはシングルプレイヤーと呼ばれ、ある意味最高の効率を誇った。

人類が電脳世界に閉じ込められてから200年。攻略階層は50層。今、時代は動きだし始めていた。

その50階層にてシングルプレイヤーである俺。エルトはモンスターとの戦闘から休息を終えて再びダンジョンの攻略に歩み出していた。

「白魔法選択『リトルフラワー』」

光の灯らない暗い迷路に掌から発生させた白い球体を浮かべて照らしながらゆつくりと歩を進めていく。

ダンジョン内限定ではあるが攻略プレイヤーは魔法というスキルを使う事が出来るようになる。回復や攻撃、補助や妨害といった多種多様な魔法が存在する。

勿論、無条件ではないが。

ダンジョンに入ると最初レベル1の表示と共に職業を選択する権利を与えられる。

レベル1で選択出来る職業は『剣士』『魔術師』『方術師』『盗賊』の4つ。その内、魔術師と方術師を選択した場合にのみレベルに応じて魔法を使えるようになる。二つの職業の違いは魔術師は攻

撃や妨害の魔法が多く、方術師は回復や補助の魔法が多い。

ちなみに剣士を選択した場合にはレベルの上昇時に力のステータスが上がりやすく盗賊の場合は速さのステータスが上がりやすい特徴がある。

ついでに力や速さといった基本ステータスの他にLP、SP、MPといったパラメータが表示される。

LPはライフポイント。文字通り命の残量であり本人がいくら元気だと主張しても、これが0になれば死亡扱いになって本当に死んでしまう。唯一他のプレイヤーからでも目視出来るパラメータでもある。

SPはスキルポイント。魔法を使えない剣士や盗賊などがレベルによって憶える技を使う為に必要なポイント。例えば技を習得していたとしても使用する為にはこのポイントが一定値ないと使用する事が出来ない。

MPはマジックポイント。意味的にはSPとほぼ同じであるが魔法限定。

何故HP ヒットポイントではなくLPなのかはヒットポイント(耐久力)とは違って尽きれば即死んでしまうという文字通りの意味だからだ。

ちなみに俺が選択したのは剣士。

剣士である俺が何故白魔法などという方術師の真似事が出来るのかというレベル50を超えたプレイヤーには高位職を選択する権利が発生し、剣士の後継職である騎士ヘクラスチェンジする事で方術師のみが使えるとされた白魔法を使えるようになる。

もっとも騎士には騎士専用のスキルが用意されているので普通はそっちを優先して習得するもののだが俺はシングルプレイヤーの為、回復や補助を優先的に取っていた。

もっとも騎士だというのに俺は碌に鎧も身に付けず黒いシャツに黒いズボン、黒いジャケットといった防御力とは無縁の装備に身を包み、しかも黒髪黒目の為に全身黒づくめという有様だった。

ちなみに、これらは一般の服装であってダンジョン内で装備出来る鎧や盾、兜とは別物と判別される。言ってしまうえば俺の防御力は0に等しかった。

唯一装備している防具と言えば頭に巻いた、これまた黒いバンダナくらいだった。

どちらかと言えば俺の恰好は盗賊、または盗賊からクラスチェンジ出来る後継職の暗殺者に近いかもしれない。

あと装備している物と言えば背中に背負ったこれまた黒い剣くらいだ。

特に長くもなく短くもない標準的な扱いやすさを基準とした剣だが、こいつには特殊な銘が入っている。

魔剣・ソウルブレイカー。

標準的な見た目の割にかなり重い剣で、それに比例して頑丈な剣だった。

正直、切れ味の方は微妙で効果的には剣というよりメイスや斧に近い感覚だ。しかし、こいつを両手で持って叩きつけると大抵敵の防御を粉碎してダメージを与える事が出来るので自分としては気に入っていた。

通常よりも頑丈なのも鎧を身につけない俺としては盾代わりに重宝している。

白魔法で作りだした光球を先導させるように俺は道なりにダンジョンを進んでいく。

当初40年も掛かって、まだ50層なのかと首をかしげたくなるが、その理由の一つがダンジョンの異様なまでの広さだった。

通常、地下にこれほど広い空間を作ってしまうえば土砂崩れなど必須なのだが、この世界はデータによって作られている為、管理者が是とすれば何の問題もなく広大な空間が作れてしまった。

その為、層が深くなればなるほどダンジョンが広大になるという仕組みが成立してしまい1層が東京ドーム程度の広さだったのに比

べ50層はちよつとした街くらしいの広さの迷路が展開される有様だった。

ダンジョン内では歩いた道が自動でマップに登録される仕組みになっているが、ここまで広い迷路だと余程運がなければ一週間や二週間では出口に辿り着く事は出来ない。

「？」

そんな感じに憂鬱になりながら歩いていると前方から聞き覚えのある悲鳴や怒号が聞こえてきた。どうやら誰かが戦闘中らしい。

シングルプレイヤーの俺としては誰かに遭遇するのは避けたいところだが既に登録されたマップを引き返すのも癪なので苦情覚悟で前に進む事にした。

「前衛持ちこたえて！魔法急いで！」

進むにつれて戦闘の様子が見えてくる。

確認される人数が4人なのでパーティプレイヤーかと思ったが肩に装着された特徴的なエンブレムには見覚えがあった。

騎士団の紋章。

どうやら騎士団の先遣隊らしい。

彼らは騎士団の名の通り騎士が大半を占めている。その為4人中3人が騎士、残りの一人が魔術師の後継職である魔道師だった。

敵は剣を持った大きなトカゲの化け物リザードソルジャー二匹と白い大熊ビッグフッドだった。どちらも先ほど俺が倒したモンスターだ。

担当が一番防御力の高そうな鎧を身にまとった男がビッグフッドを抑え、軽快そうな装備の男の騎士がリザードソルジャーAを、残り一匹を最低限の鎧に身を包んだ槍をもった女性騎士が担当。そして彼らに護られる形で背後に控えた魔道師が魔法を唱えていた。

正直、騎士が白魔法を使う事が出来るとはいえあまりバランスの良いパーティではないと思った。何より、この階層に来てからの経験が薄いのか彼らには過度な緊張が見られる。

「硬くならないで！いつも通りやれば良いのよ！」

いや。唯一女性騎士だけは他の3人に指示を出しながらも軽快な動きで担当したりザードソルジャーに的確にダメージを与えていた。恐らく彼女がこのパーティのリーダーで他の3人を監督、補助する為に同行していたと思われる。そこに強敵が3匹現れたから急遽助っ人に入った。多分そんなところだろう。

「ぐあっ！」

そうこう考えているうちに状況が変化する。モンスターの中でも特に力の強い熊系のモンスターには低確率ではあるがクリティカルヒットという防御を無視した攻撃を仕掛けてくる事がある。

この場合、分厚い鎧を身に付けていた事が完全に裏目に出た。防御を無視するという事は鎧を貫通して攻撃を受けたようなもの。唯一視認出来るLPの残高を表示するゲージが一気に減って危険域を表すレッドに色が変わる。

「な！・・・くそ！」

そして、このダンジョンの特性の一つにLPの最大値の3分の1以上のダメージを一定時間内に減らされると10秒程度の行動不能時間が発生するという物がある。これはダンジョン内特有の状態異常であり、行動不能中のプレイヤーからは離脱不可能な最悪の仕様だった。

たかが10秒、されど10秒だ。

非戦闘時ならばともかく、戦闘中に、しかも目の前に敵が迫ってくる状況で10秒は致命的すぎる。

「く！白魔法選択『ヒーリング』！」

リーダーである女性騎士は援護に回ろうとするがリザードソルジャーはこの階層で恐らく最高難易度の敵だ。瞬殺するのは難しいし背中を向ければ女性騎士の方が危険にさらされる。よって気休めの回復魔法を行動不能の騎士に掛けるのが精一杯だったのだがヒーリングでは10秒の行動不能は回復しない。危険領域まで下がったLPがほんの少し回復しただけだ。

「逃げて！」

無茶を言う。逃げられるくらいなら自分に向かって来る大熊に対して恐怖に震えたりしないだろう。

ま。ここまでか。

「く」

騎士の目の前に迫ったビッグフットの攻撃モーションに対して女性騎士は咄嗟に目を逸らし。

「白魔法選択『ヒーリングLv4』」

「え？」

響いた声と同時に瀕死に近かった騎士のLPゲージが一気に最高値まで回復する。

「連続魔法選択『デイスペル』」

それと同時に行動不能状態だった騎士の状態異常が解除され振りあげられていたビッグフットの一撃をかるうじで回避した。

無論この場で彼を援護出来た者なんて一人 俺しか居ない。

「あ、貴方は・・・？」

「余計なお世話だったか？」

「・・・いえ。助かりました」

「ならついでだ。白魔法選択『プロテクトLv3』」

再度俺の白魔法によってその場に居る4人全員の体が白い光に包まれる。ヒーリングはLPの回復、デイスペル状態異常の解呪、そしてプロテクトは防御力の向上だ。

「加勢はここまでで良いか？」

「ええ。十分です」

力強い言葉を返してきた女性騎士は気力を復活させ見事な指揮で戦闘を乗り切った。

「騎士団、第八分隊、隊長のエリシアです。御助力感謝します」

「俺はエルト。たまたま援護出来る位置に居ただけさ」

「それでも貴重な団員の命を救っていただいた事に変わりはありません。何とお礼を言って良いのやら」

「ああ、それなら・・・」

別にそのつもりで助けた訳ではないのだが。

「マップ情報を交換してくれるとありがたい」

「ええ。それくらいならお安い御用ですけど」

「助かるよ」

いくら俺が頑張ろうとシングルプレイヤーである以上、ダンジョンの探索という奴は他の人海戦術をとれるプレイヤーに全く及ばない。その意味でマップの情報を共有する事は非常にありがたかった。「ひよっとしてシングルプレイヤーの方？」

「そうだけど」

「この階層を一人では流石に危険じゃないですか？」

「それを言ったら49層や、その以前の階層だって同じさ」

1層からここまで俺はずっと一人でやってきたのだから。

「ああ。だからですか」

「？」

「騎士でヒーリングLv4なんて初めて見ました。方術師の方じゃないですよね？」

「一人だと白魔法の方が何かと便利なんでね」

実際の話、ヒーリングLv4なんて高位の方術師か方術師の後継職である神官でも取っている者はそうはいない。

MPの消費は大きい物の対象のLPを問答無用で全回復させるヒーリングの最高レベルだし。

ちなみに取る人が少ない理由は簡単でヒーリングLv3でも殆どの高レベルプレイヤーのLPを全快させるのに十分な回復力があるからだ。

違うのはLv3は高い回復力があるのに対してLv4はどんなにLPが高くとも全回復に出来るといふ点のみ。例えばLPが1000程度ならLv3でも余裕で回復出来るがLPが200000だった場合は流石に全快は出来ないという程度の違い。まあ、LP20000は勿論10000なんて持っているプレイヤーすらそうそう

居ないけれど。

去っていく黒い騎士を見送りながら私は少しだけホツとしていた。
「シングルプレイヤーに助けられたなんて副団長に知られたら大目玉ね」

「すみません、エリシアさん。俺達が不甲斐ないばかりに」
「仕方ないわ。この階層の難敵が3体も同時に現れたんですもの。
むしろ良く生き残ったというべきよ」

「助けられちゃいましたけどね」
「まあ、ね」

正直な話、少しばかりプライドが傷ついたけれど命には代えられない。助けられておいて文句を言うほど私は恩知らずではないつもりだ。

「それにしても変わった騎士だったわね」

「あれって『死にたがり』のエルトじゃないですか？」

「死にたがり？」

「騎士の癖に鎧も盾も身につけない。防御スキルも殆ど取って居ないって話ですよ。それでついたのが『死にたがり』のエルト」

「そう、なのかな？」

私は団員の一人である彼の言葉に首をかしげる。

「本当に死にたがりの人がヒーリングLv4なんて取るかな？」

「・・・」

「彼には色々秘密が多そうね」

「そ、それより俺達の試験はどうでしたか？」

試験。私以外の3人は49層から50層に移る力があるかどうかを測る為の試験として今日この場に居合わせていた。

「命辛がら助けられておいて合格に出来る訳ないでしょう。君たちは明日から49層に戻ってレベルの底上げよ」

「え〜」

「嘆きたいのはこつちよ。せつかく新設された第八分隊は暫くお預けなんだから」

今日の試験に3人が合格した時に限り私は第八分隊の隊長として3人を指揮して50層を探索する予定だった。しかし試験の結果を見る限り彼らではまだ少し力不足が否めない。よって彼らには49層に戻ってレベルが上がるまで3人で頑張つて貰う事になる。

そして私の方は明日から暇を持って余す訳だ。

翌日。

私は予想通り暇を持って余してダンジョン前の広場で退屈を紛らわせていた訳だが流石に50層を一人で探索するほどの実力はない。

昨日の彼 エルト君だったかな？ なら一人でも入るのだからうけど騎士団の規則の点から見ても一人でダンジョンに入る事は堅く禁止されている。

「暇だなあ〜」

ボンヤリと広場を見回してみるが私と即興で組めそうなレベルのプレイヤーは。

「あ。居た」

何という偶然か昨日の黒い騎士が広場のベンチに腰掛けてボンヤリお茶を啜っていた。

相手がシングルプレイヤーと分かっているのに誘うのはマナー違反かな〜と思ったが聞くだけならタダだし、ちよつとだけ彼に声をかけてみる事にした。

「こんにちは〜」

「ふあ？」

なんとというかお茶だけでなくお団子も食べていたらしく、お団子を口に含んだまま間抜けな返事を返してくる彼。ちよつと笑いそう。

「暇そうだね」

「いや。これ食ったら出かけようと思ってたよ。うん」

嘘臭い。と思っただけど指摘はしないでおいた。

「それなら一緒に行かない？君がシングルなのは知っているけど私も今日は一人でさ。騎士団の規則上一人じゃ入れないのよ」

「別に良いけど。昨日の3人は？」

「昨日の失態で49層で居残り」

「あらら」

大して気の毒そうでもなくエルト君は湯呑みとお団子のお皿をアイテムウィンドウを表示して収納した。

この電脳世界と現実世界との大きな差はここだろうと思う。

この世界においてかさばりそうな荷物は個人データのアイテム収納欄という物に収納して運ぶ事が出来る。しかも個数制限はあるが重量制限はないという出鱈目具合だ。極端な話、アイテムとして収納出来るならばどんなに重い物であろうと出し入れ自由に出来る。

「さて。それじゃ行きますか」

「あ。待つて。パーティ登録しないと」

「ああ。そう言えばそんなの必要なんだった」

エルト君はシングルの為かどうやらパーティという概念に欠けるようだった。基本的にパーティはパーティリーダーが作成した物に1〜20人までのフレンド登録された人を誘う事が出来る。逆に言うとフレンド登録　つまり友達として登録されていない人とパーティを組む事は出来ない。

「それじゃフレンド申請出すね」

「分かった」

そうはいつでも申請は簡単なもので個人ですぐさま出す事が出来るし、それに相手が了承すればフレンド登録完了だ。エルト君は特に迷うことなく了承してくれたみたいですがさまフレンド登録されて続いて彼にパーティ登録申請を出す。

「ふん。これがパーティ登録か。初めて見た」

「え？」

彼がシングルなのは知っていたけれどパーティ未体験だとまでは

思わなかった。

「君って本当に秘密が多そうだね」

「そんな事より行くなら行こうぜ。ダンジョン登録カード忘れてないよな？」

「当たり前」

ダンジョン登録カード。基本的にダンジョンで手に入れた武器や防具はダンジョンの外へ持ち出す事が出来ない。その為、そのアイテムのデータが入ったカードをダンジョンから表に出る時に配られる。

このカードを持って居れば、それまでに獲得した武器や防具をダンジョンに入った段階で装備した状態に直ぐに移行出来る。

ちなみにこのカードには現在のレベルや取得した魔法、スキルなども登録されているので万が一無くしたら1層のLv1からやり直しという羽目になる。しかも装備無しから。

そんな大事なカードなので勿論肌身離さず持っている。

「お りゃあ!!!」

50層に付いて早々エルト君は遭遇したモンスター相手に獅子奮迅の活躍を見せた。彼の持っている本来なら片手で持てそうな剣を両手持ちして昨日遭遇した難敵、リザードソルジャーに真上から叩きつける。

リザードソルジャーはエルト君の攻撃を左手に持った盾で防御しようとしたが その盾ごと粉碎してリザードソルジャーの左腕が千切れ飛び敵のLPが大幅に減少する。そして休む間を与えずに再度振りあげた剣を次は脳天めがけて振り下ろす。エルト君のあまりにも重い攻撃に防御するか回避するか敵のAIが判断を遅らせたのかりザードソルジャーは何をするでもなくエルト君に斬り伏せられた。

「凄い力ね」

「この剣の特性だね。力任せに叩きつけると相手の防御特性ごと破

壊出来るんだ」

「へえ〜」

タダの剣ではないと思っていたけれど相当な業物だったらしい。それからも幾度となく戦闘になったけれど基本的にエルト君が力任せに戦線を切り開き、バラケタ敵を私と背中合わせに対処する時は私に優先的に補助魔法を掛けてくれた。

ダンジョンに入って数時間。予想を遥かに超えてマップの作製は進み、そして密かに私のレベルが上がっていた。

ダンジョンに入る前の私のレベルは67。これはダンジョンを攻略する面子の中でもそれなりに高い方で、私の予想では次のレベルに上がるまで数週間は必要と見ていた。

それがエルト君の活躍で短時間で上げられてしまった。

流石にペアは経験値効率が半端じゃない。

基本的にモンスターを一人で倒すと倒した人に100%の経験値が割り振られる。これが二人だとある程度ボーナスがつくが50%ちよいという経験値に抑えられてしまう。

私は基本4人から5人のパーティで行動するので経験値は20%から30%が関の山という事になる。

その私にとつてたつた二人で山分け出来るペアのパーティは想像以上に効率が良かった。

無論、エルト君の怒涛の快進撃があればこそだが。

「ありがとう。今日は助かった」

「礼なら今度またマップデータを交換してくれ」

「機会があったらね」

そして私のエルト君に対する好印象のまま今日の探索は終わりを迎えた。

第二章

騎士団のエリシアと知り合ってから彼女が暇な時に時々ダンジョンの攻略に誘われる事が増えてきた。

基本シングルの俺としては二人というのは効率的に今一なのだがエリシアの仁徳なのかそれほど不快な印象は受けて居なかった。

「ふむ」

ちなみに俺は現在ダンジョンの外でNPC ノンプレイヤーキヤラクター相手にアイテムウィンドウを開いてアイテムの整理中だった。

基本的にダンジョンの中でいくらモンスターを倒しても、この世界で通用するお金は落としてくれない。落とすのはモンスターに依じて所有している固定アイテムだ。

その内、武器や鎧といったものはダンジョンの外へ持ち出す事は出来ないが、それ以外の雑貨ならばアイテムウィンドウに収納してダンジョンの外へ持ち出す事が出来る。それをNPC相手に売りさばいてお金を得る訳だ。

ちなみにこのNPCにお金を払えば食料なども売ってくれる便利な奴だったりする。

基本、この世界で生活する人はNPCから食料を買ったりせずに自分たちで畑を耕したり山に入って獲物を狩って生活している。そういう方法でも食料を手に入れる事は出来るがNPCで買うのとどう違うのかというと大して違いはない。何と言ってもどちらもデーターだ。

当然、交渉次第では畑で作られた物をお金を出して交換して貰う事も出来るが シングルの俺にそんな社交性がある筈もなく基本NPCから買って賄っている。

「大分溜まってきたな」

何がかつて？お金の話に決まっている。

シングルでおまけに防具にお金をかけない俺は特にお金がたまりやすい。最前線の階層で出たアイテムを持ち帰ってNPCに売るだけでも生活費は余裕で賄えて貯金も大幅に増えてきている。

断わっておくがダンジョンに入れば誰でも楽にお金が儲けられる訳ではない。実際1層から10層までのダンジョンで出るアイテムには碌なものがないし、もし本当にダンジョンを攻略しながら生活するとしたら最低でも15層程度でモンスターと戦わなくてはならなくなる。

そして一般人にとって15層というのは十分驚異の階層だった。

「一、十、百、千、万、十万・・・」

「何を数えてるの？」

「!?!」

ステータスウィンドウに表示された自身の貯金額を数えている最中に背後から声を掛けられて飛び上がりそうになった。

「・・・」

「？」

振り返るとエリシアが不思議そうに俺を見つめていた。

「ちよつと貯金の残高の確認を」

別に隠すほどの事でも無いので正直に打ち明ける。ちなみに俺の貯金残高は674万クレジットだった。現実世界の頃のお金に換算してクレジットというのは円とイコールで考えて貰って良い。

「ふ〜ん。エルト君なら沢山稼いでそうだね」

「前に大きい買い物したから、そんなでもないさ」

一応謙遜しておいたが674万は十分大金だ。

「それより、そちらさんは？」

エリシアは今日は一人じゃなかった。エリシアと同じく騎士団の紋章を肩に付けているので御同業だろうが。

「騎士団、副団長兼第二正規隊、隊長のアリサです。よろしくね、エルト君」

「・・・初めまして」

特に意識したつもりはなかったのだが俺の挨拶は憚然としてものになってしまった。

「一応貴方とは40層と45層のガーデン攻略の際に顔を合わせているのだけど憶えていなかったみたいね」

「記憶力にはあまり自信がないもんで。特にどうでも良い人の顔は覚えられない主義なんだ」

「ちょ！エルト君!？」

俺の台詞に焦ったのはアリサの隣で気まずそうに佇んでいたエリシアだった。

「自分で言うのもなんだが正直なところが俺の美德だね」

「確かに自分で言う事ではないわね」

「・・・ちよつと飲み物を買ってきます」

俺とアリサの火花を散らす応酬に早々に根をあげて離脱していくエリシア。俺達はそれを横目で見送って。

「なにが『よろしくね、エルト君』だ。鳥肌が立つ」

「貴方こそ『初めまして』だなんて白々しい」

エリシアの前では抑えていた本音合戦が開始された。

そう。俺とこのアリサは言うまでもなく知り合いだった。そして見たまんま相性は宜しくない。

「丁度良いから忠告しておきますけどね、ウチの有望な新人に余計なちよつかいを出さないでもらえるかしら？」

「そう思うならもつとしつかり教育しろ。俺がいなかったらあの女のパーティーは確実に全滅していたぞ」

「勝手に恩を売っておいて対価を要求するなんて最低ね」

「は！恩知らずって意味じゃお前の方が十分恩知らずだろうが」

「それは貴方が・・・!」

エスカレートする口論は、しかし唐突に俺とアリサの両者が沈黙して幕を閉じる事になった。エリシアが戻ってきた。のではなく話の方向性が両者にとって都合の良くない所に行きそうだったから。

「止めましょう。今更貴方とどうこう言っても始まらないわ」

「そうだな」

俺達は互いに視線を逸らして会話を打ち切った。というか考えてみれば俺がこの場にとどまる理由が特にならない。

「それじゃな」

「あ」

アリサに背を向けてそのまま去ろうとした俺にアリサが何か言いかけて言葉を止める。怪訝に思った俺が振り返るとアリサは俺に何か言いたげな表情で　言葉を飲み込んだ。

俺はなんとなくアリサの言いたい事が分かった気がしたが何も言わずに再度背中を向けて歩き出した。

アリサとの再会は思っていたよりもずっと早く訪れた。

アリサ本人から釘を刺されたのか何なのかエリシアと少しばかり疎遠になった為に俺は再びシングルで50層を探索していたのだが。

「騎士団は基本一人でダンジョンに入る事は禁止じゃなかったのか？」

「団長と副団長には特権があるのよ。週に10時間までなら一人で入っても良い事になっているわ」

よりによってダンジョンの中で一人探索をするアリサに遭遇してしまうとはついてない。

俺はアリサを無視して自分のマップ情報を確認し、そのまま未開マップの方向へと歩き出し。

「ちょっと。付いて来ないでよ」

何故かアリサも俺と同じ方向へと歩き出していた。

「俺のマップで未登録ルートはこっただけなんだよ」

「何が『俺の』よ。エリシアから騎士団のマップ情報を引き出したのだとしたら被っているのは当たり前じゃない」

「・・・」

流石にその点に関しては言い返す言葉もない。

俺はそのまま無言で歩きだし、その隣ではアリサも黙々と歩いて行く。どうやら俺の後ろを歩くのが大層気に入らないらしいが俺としてもアリサの後ろを歩くのなんてまっぴら御免だ。

結果として俺達は横並びでダンジョンを突き進み 何故かドンドン早歩きになっていった。

「……………」

アリサの後ろを歩くのはまっぴら御免だが走り出すのはなんだか大人げなくて絶対にやりたくなかった。アリサも同じ信条なのか俺達はひたすら横並びで早歩きを続け。

「……………」

二人同時にピタリと立ち止まった。

「貴方に話しかけるのなんて鳥肌が立つけど少しおかしいと思わない？」

「お前と会話するなんて向こう5年はお断りだが同感だ」

俺達はひたすら早歩きでダンジョンの通路を歩き続けていた。それなのにいつまで経っても突き当たりに差し当らないし分岐路も曲がり角も来ない。

「おまけにモンスターとすら遭遇していない」

「畏？」

俺がアリサの問いかけに返事をする前に背後の通路の天井が勢い良く落下してくる。

「走れ！」

俺はアリサの返事を待つ前に脱兎の如く走り始める。俺もアリサも基本的に鎧や盾を身に付ける事を嫌う。当然その分重量は軽くなり走る速度は上がる訳だが。

「あ」

だからと言って落とし穴に落とされて平気という訳ではなかった。

「……………ああ……………!!!」

間抜けな悲鳴を上げて共に落下していく俺とアリサ。願わくば落

下ダメージでLPが0にならない事を願うばかりだ。

「いづづ・・・」

「た、助かったわ」

「俺は助かってない。重い。早くどけ」

「む」

男女の純粋な体重差の為か俺の方が先に落下して床に叩きつけられ、その上にアリサが降ってくるという二重のダメージを受ける羽目になった。

渋々俺の上から身を起こすアリサを押しつけて俺は減少したLPバーを確認してからヒーリングを使うほどのダメージではない事を確認する。

「今日は災難だわ。会いたくない人には会っし、間抜けな畏に掛かるし、おまけに空気を読めない馬鹿に重いだなんて」

「うるせーよ」

俺はアリサを無視して立ち上がると周囲を確認する。

どうやら狭い部屋のようになっているようだが出口らしい出口が見当たらない。

「こんな場所で貴方と二人きりなんて耐えられないわ。じゃあね」

そう言っアリスはアイテムウィンドウを開いて砂の入った小瓶を取り出すと、それを床の上に叩きつけた。

帰還の為の脱出アイテムだった訳だが。

「あれ？」

床に散らばった砂はそのままスーッと消えていき何も起こらなかった。本来ならあの砂を中心にダンジョンの1層の入口までのゲートが開く筈だったのだが。

「白魔法選択『ゲートポイント』」

俺もアリサが床に叩きつけた砂を同じ効果のある白魔法を選択してみるが 何も起こらない。

「・・・」

「これってひよつとして・・・閉じ込められた？」
最悪の展開だった。

落とし穴の深さは約7メートルといったところ。そして罾の作動が終了した穴は自動で元に戻っていた。つまり今俺達が居る部屋には天井がしつかりとした作りで見下ろしている。

基本的にデータであるダンジョンの構造物はどんな攻撃力の高い武器や魔法であっても破壊は不可能だ。

つまり例え壁をよじ登るって上までいったとしても天井を開かない限りは脱出は不可能という事になる。

「何か見つかったか？」

「何も。そっちは？」

「何かあったなら聞いてない」

「それもそうね」

その為に俺達は手分けして天井を開閉させる仕掛けが無いか探してみたのだが見つからない。

「まったく。落とし穴の下に魔法禁止区域を作るなんて性質が悪いわ」

魔法禁止区域。文字通り魔法を使用出来ない空間という意味だが、その禁止には特殊なアイテムも含まれる。設定上魔法と同じ効果のあるアイテムという奴は魔法と同じ扱いになっている為と言われているが。

「ねえ」

「ん？」

「念の為に聞いておくけれど貴方の方の残りの食料はどのくらい？」

「非常食を含めても持って三日だな」

「そう」

アリサは何故か気まずそうにして壁を背にして床に座り込む。

「で。お前の方の食料は？」

「・・・」

「おい。お前まさか・・・」

「仕方ないでしょう！気晴らしにこつそり騎士団を抜け出してきたんだから食料を用意する時間なんてなかったのよ！」

「・・・逆切れすんな」

というか、こいつ副団長の特権でダンジョンに入ったとか言っておきながら嘘だったのか。ま。騎士団の副団長がそんなに暇な訳ないか。

「つまり。二人で分けるとなると持って1日ちよいくらいか」

「べ、別に貴方に食料を恵んで貰おうなんて思っていないわよ」

強気に言い返してくるアリサだがタイミング悪くというか食べ物話などして本人が意識したからなのか彼女のお腹からは『くう』という、その用途とは裏腹に可愛らしい音が響いてきた。

「・・・」

「し、仕方ないでしょう！急いでいたからお昼ご飯食べ損ねたのよ」

「何も言っただけよ」

「うう」

大声を出して更に空腹を意識したのかアリサは壁をズルズルと滑って床の上に丸くなって寝ころぶ。

「はあ〜」

俺はその騎士団の副団長とは思えない情けない姿に思わず同情を禁じえず、仕方なしにアイテムウィンドウを開いて食事の準備を開始した。

「言っておくが非常食だから味の方は保証しないからな」

「・・・ありがと」

なんだかんだと文句を言いつつも空腹には勝てなかったのか素直に手を伸ばしてくるアリサ。

「そう言えば前にも同じような事があったね」

二人で黙々と大して美味しくもない非常食を食べているとアリサが天井を見上げながらポツリとつぶやいた。

「あの時は、こんなダンジョンなんかじゃなくて普通の家の地下室だったけどさ」

「そう言えば、そんな事もあったな」

「ねえ。憶えてる？あの時はさ・・・」

ポツリポツリと話の種を見つけては語りかけてくるアリサ。正直、昔の話なんて聞きたくもなかったが多分、今アリサは自分で思っている以上に追いつめられているのだろう。そこから逃避する為に自分と運命共同体である俺と共通の会話をすることで自制を保っている。だから俺は『止める』とは言わなかった。積極的に相槌を打つ事もしなかったが。

閉じ込められてから三日が過ぎた。

当然、二人で分けた食料などつくの昔に底を着いて、その後からは俺が趣味で大量に保存しておいたお茶を飲んで空腹をやり過ぎしていた。

唯一の救いといえば、この落とし穴　　というかダンジョンその物の仕様なのだが食べ物摂取は必要不可欠だが排泄は不要になっていた事だ。当然の話だがダンジョン内にトイレなんか無い。どういう風にデータを改竄してあるのか知らないが、これだけは助かる。無論、ダンジョンの外では必要不可欠だが。

「あゝあ。締まらない最後だったな。騎士団の副団長である私がこっそり部屋を抜け出して間抜けにも落とし穴に落ちて餓死しましたゝなんて良い笑い話だわ」

そしてアリサは悪い意味でハイになっていた。

空腹とストレスと寂しさで思いついた事をペラペラ喋っては勝手に絶望して黙り込む。そんな事を何度も繰り返していた。正直鬱陶しい。

鬱陶しいが　やはり止めるとは言わなかった。

アリサはそうやって壊れそうになる自分をどうにかして持たせていると分かっている故に、その邪魔をしようという気にはならな

った。

しかし、そのアリサもそろそろ限界だろう。

「なあ」

「何？」

そっけない言葉とは裏腹に期待の目で俺を見つめてくるアリサ。

この状況に追い込まれてから極力無関心を貫いてきた俺が自分に構ってくれる事が事の他嬉しいらしい。

「ここから脱出する手段があるって言ったらどうする？」

「今更そんな話？」

しかし俺の振った話題がお気に召さなかったのか期待を裏切られたという風に機嫌を損ねる。

「もう三日も閉じ込められて何も見つかっていないのに今更何かが見つかる訳ないじゃない」

アリサの言う事は正しい。正しいのだが。

「実は初日に見つけてはいたんだが、ちょっと事情があって黙ってた」

「・・・え？」

呆気にとられるアリサを前に俺は今まで自分がずっと座り込んでいた壁から身を逸らして、そこに書いてある文字をアリサに見せる。

「な、なんで早く言わないのよ！私、騎士団の仕事を三日も無断でサボっちゃったのよ！」

怒鳴りつつもアリサは俺の示した文字に縋りつくように取り付いて凝視する。

そこに書いてあるのは普通に見れば解読不能な文字列。勿論、俺達にこんな文字を解読する知識はないのだが。

「翻訳ツール。翻訳ツール」

ダンジョンをある程度攻略した者には特典として、この手の文字を翻訳する為のツールが与えられている。

アリサは早速壁に書かれた文字を自分のシステムウィンドウに取りこんで翻訳ツールに通した。

「えっと。『この扉を開かんとする者……』」

そして翻訳した文字を早速声に出して読み初めてアリサは、しかし途中で言葉を途切れさせて言葉を止めた。

ちなみに壁にはこんな文章が書かれていた。

『この扉を開かんとする者は誓いの儀式にて誓いの言葉をもって宣誓せよ』と。

「こ、これって……」

「ああ。多分この落とし穴は罠じゃなかったんだろつな。というか落とし穴はおまけで多分イベントクエストだ」

イベントクエストとはダンジョン内で特定の条件を満たす事で発生するイベントであり、その仕様はこの電脳世界が地球という世界の娯楽であった名残の一つと言われている。

「今回の条件は恐らく特定の条件を満たした男女が、あの通路を通過する事でイベントが始まったんだろつ」

「最低。最低。最低」

呪詛のようにぶつぶつ呟くアリサだが、その言葉は三日も事実を黙っていた俺への物ではなく、このイベントその物へ向けられていた。

「で。どうする？」

「やるしかないでしょう！もうこんな場所に留まるなんて1秒だって御免よ！」

ついでに言うと、これこそが俺がアリサに三日も真実を内緒にしていた理由だったりする。アリサの事だから多分、最初から事情を知っていたればもっと長い時間意地を張り続けていただろう。

「それじゃ、やるか」

「い、言っておきますけどね。仕方なくなんだからね。勘違いしないでよね」

「へいへい」

そう言っただけはアリサへ手を差し伸べて、それを僅かに躊躇しながらもアリサも手を伸ばして俺と手を繋ぐ。そして空いている方の

手で俺達は文字の書かれていた壁に触れた。

『汝ら……』

その瞬間、小さな部屋の中に響いてきたのは古臭い合成音声。

『汝ら。その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、

これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？』

この文言は遙か昔、まだ地球という惑星が文化を有していた時に作られた『ある儀式』の為に作られた言葉。

「誓います」

「……誓います」

それは、この電脳世界にも延々と受け継がれてきた物。

『では誓いのくちづけを』

一般的にそれは『結婚式』と呼ばれる。

「……勘違いしないでよね」

そして俺とアリサは手を繋ぎあつたまま唇を重ねた。

第三章

紆余曲折はあったとはいえ俺達は何とかダンジョンから脱出する事には成功した。

もつとも俺は兎も角アリサは騎士団に明確な事情を話す事も出来なかった為、暫くの間は騎士団の本拠地に閉じ込められて書類仕事に精を出す事になったようだが。

「それで。結局何があったの？」

「そんな事は本人に聞け。本人に」

「エルト君、多分当事者でしょ？」

俺にこんな事を聞いてくるのはアリサが謹慎になった為に自由に俺にアクセスできるようになったエリシアだ。

「知らん」

「怪しいなあ」

ま。別にアリサの為に訳じゃないが俺としても別に事件のあらましを他人に話すつもりはなかった。話してアリサと噂にでもなったりしたらたまったものではない。

「でもアリサさんでも騎士団を抜け出して一人でこっそりダンジョンに、なんて意外にお茶目なところがあつたんだなあ」

「今回はお忍びだったみたいだが団長と副団長には特権があるんだろ？週10時間までは一人で入ってもOKって」

「・・・何それ？」

アリサに聞いた話をエリシアに確認をとつたら奇妙な目で首をかしげられた。あれ？

「団長と副団長は基本的に内務処理に追われているから一人でダンジョンに入っているような時間が取れる訳ないじゃない。例えばそんな特権があつたとしても、あの人達が一人で入っていたら他の団員とのレベル差が付き過ぎるし団内でのチームワークを高める為にも

集団行動を優先すると思うわ」

「・・・騎士団って今はそんな状況なのか」

「まあね。元々は解放軍が頼りにならないって理由で立ち上がった組織だったらしいけど今となっては人が増えすぎて誰か一人が皆を率いて前線に立つって状況じゃなくなっているね」

「・・・」

アリサの奴、それであんなにピリピリしていたのか。

「でも一旦戦闘に参加しちゃえばあの二人は本当に凄いなだよ。私も何回も見ただ訳じゃないんだけど特にアリサさんは特別だね」

フフンと俺に対して自慢げに語り始めるエリシア。

「あの人の持つ特殊兵装は電腦世界に一つしかないってワンオン品でさ。それを、こう、何て言うんだろ？」

「エクストラウエポン『神槍』グングニル。持ち手は騎士団、副団長アリサ。戦闘時にはグングニルを展開して身に纏い『戦乙女』ヴァルキリーとして敵を風払う。だろ？」

「・・・良く知ってるね」

「結構有名だからな」

特に俺はアリサとは因縁浅からぬ仲だし。

「ま。知っているなら話は早いけど、あれ格好良いよね。こう青い鎧とか兜とかもそうだけど背中に生えた翼でビューンって飛んだりしてさ」

ヴァルキリーとなったアリサには純白の翼を与えられ空を独占する権利を与えられている。ま。ダンジョン限定だから本当に空は飛ばないけど。

この間はあるな痴態を演じたアリサだがダンジョン内限定とはいえ恐らく電腦世界で三本指に入るくらいの強さを持っている。

ちなみにいくらヴァルキリーでもダンジョン内の建築物までは壊せない。よって閉じ込められた状況では何の意味もなかったりする。

「あゝあ。私も伝説の武器が欲しいなあ」

「そんないくつもポンポン転がってないだろ」

実際、アリサがグングニルを手に入れた経緯にしても偶然という要素が濃い。確かいらぬアイテムを整理していて傍にあった滝の中にいらぬ物を投げ込んだら滝が割れ始め、その中にグングニルが突き立っていたとか。そんな話だった筈。

「でも、いつかは私もあんな風に神秘的な姿で戦ってみたいなあ。ほら。私ってアリサさんに憧れて騎士団に入った訳じゃない。武器もアリサさんを真似して槍を使ってるしさ」

「お前の槍ってそういう経緯かよ」
正直、エリシアの武器を選ぶ経緯にちょっとゲンナリしていた。

アリサの謹慎が解かれたのは二週間後の事だった。

正確には二週間経ったからアリサが解放されたのではなく、二週間経ってダンジョン内でガーディアンが発見された為だった。ちなみに見つけたのは俺だ。

エリシアも一緒だったけど。

この日から騎士団はレベルの高いプレイヤーに次々と声を掛けていきガーディアン戦に対する準備を進めていった。

「今回このガーディアン戦の指揮を執る事になりました。騎士団、副団長のアリサです。皆さんご協力のほどお願いします」

そう言ってガーディアン部屋の前に集まったプレイヤー達に挨拶するアリサは俺の知っているどのアリサよりも凛々しかった。

『ヴァルキリーだ』とか『美しい』とか声が聞こえてくるがアリサは毅然とした態度を崩さない。昔はもうちょっと愛嬌のある奴だったんだがな。

「装備選択『神槍』グングニル！」

俺の感想とは裏腹にアリサはアイテムウィンドウからグングニルを選択して高く掲げ、そのアリサの体が光に包まれる。

光が収まった時、青い兜に青い鎧、そして純白の翼を持つヴァルキリーが神槍グングニルを携えて降臨していた。

「相手は火属性のドラゴンだ！可能なものは耐火の準備をしておけ！」

「行きます！」

俺が周囲に指示を出している間にガーディアンが完全に浮上してこちらに狙いを定めてくる。それを確認してアリサが真っ先に飛び出した。

「やああああ　　！！！」

気合いと共に飛翔して、その落下速度と共に繰り出されたアリサの槍がドラゴンを真芯で捉える！

しかしドラゴンという奴は馬鹿みたいに硬いウロコを持っている為かLPゲージに大きな変動はなかった。

「耐火の準備が整った奴からヴァルキリーを援護しろ！正面から行くな！ヴァルキリーの援護が出来ればそれで良い！」

そして準備の整った者から順にドラゴンを回り込んで攻撃を始める。

指示出しはこの辺にしてそろそろ俺の方も攻撃に参加しなくてはならない。

そう思った矢先　ドラゴンが盛大に口から炎を吐き出した。

「！」

予想より3倍強い炎で、予想より10倍効果範囲が広がった。

耐火の装備を整えてドラゴンに攻撃を仕掛けようとしていた者たちが一斉に火達磨になった。

「まずい！」

こうなってしまうえば俺が攻撃に参加するなんて不可能だ。俺は逸早く大火傷をした者達の回収を指示して負傷者の回復に回る。

今回の戦闘には神官も何人かは居るが圧倒的に人数不足だ。この調子で負傷者が出るようなら俺が始終白魔法を使い続けなくてはいけないかもしれない。

「やあ！たあ！はあ！」

この苦戦を強いられる中、アリサは一人善戦していた。ドラゴン

がこれ以上負傷者の方へ追撃を与えないように自分に注意を引きつけ時には自分が盾になって攻撃を防いで戦っていた。

ヴァルキリーの装甲は一般的なプレイヤーが装備している盾や鎧とは事情が異なり、それ自体がLPに代わる耐久力　HPを備えている。

その耐久力は兜、鎧、盾にそれぞれ4万ずつ。計12万とアリサ自身のLPを足した数字が今のアリサの耐久力になる。

これは一般プレイヤーからみれば途轍もなく高い数字である。高い数字ではあるが　。

「く！」

攻撃を受け続けるだけの状況では十分とは言いがたい。

今回集ったプレイヤー達はレベル的にも経験的にも高い技能を持った者達だが、広範囲に炎を吐くドラゴン相手ではアリサの足手纏いになってしまっている。

結果。アリサは余分なダメージを重ねる羽目になっている。

正直、戦力にならないプレイヤー達には撤退して貰いたいところだがガーディアンの部屋は一度入ってしまったえばガーディアンを倒さない限り外には出られない仕様になっている。

一言で言うならピンチだった。

「やああああ　！！！」

そんな中、苦戦するアリサを援護しようと無謀にもドラゴンに撃ち掛かっていく一人の少女が居た。

「あの馬鹿！」

エリシアだった。

確かにアリサとしてはドラゴンの気を逸らせる援護は喉から手が出るほど欲しかっただろうがエリシアの行動はあまりにも無謀過ぎた。

しかもドラゴンは更なる切り札を隠し持っていた。

広範囲に吐き出されるファイヤーブレス。それを一点集中に収束したレーザーの如く速い炎。

エリシアにはその炎を回避する術がなく、故に何の抵抗も出来ずにエリシアの体を貫く炎。

「・・・！」

言い訳するなら勝手に体が動いてしまった。

エリシアがドラゴンの元へ飛び込んで行った瞬間から、こうなるんじゃないかと思っていた。

エリシアの体を炎が貫く直前、間に合ったのは神速の翼を持つヴアルキリー・アリサだけだった。

しかし、そのアリサにしても既にダメージが蓄積されて盾と兜の耐久力は限界を迎えていたし、残った鎧でさえ収束された炎を防げるほどの耐久力は残っていなかった。

それでも　きつとアリサならばエリシアを庇うのだと信じていた。

だから。

「え？」

体が勝手に動いてしまった。

ドラゴンの収束された炎からエリシアを庇うように押しのけて前面に立ったアリサを背後から力任せに引きずり倒した。

お陰でギリギリ炎はアリサの頭上を越えていき。

「・・・あ」

俺の体をまともに貫いていった。

背中から床に倒れる俺の体。

貫いたものが熱閃だった為か傷口が焼かれて思いの外出血は少なかった。だが致命傷には違いない一撃。

「やっちまった」

倒れたまま自分のLPを確認してみるとまだ3分の1ほど残っていたが火傷、貫通撃の追加ダメージ要素でドンドンLPが減っていくのが分かる。

「し、白魔法選択『ヒーリング』！」

そんな中エリシアが必死に俺にヒーリングを掛けているが焼け石に水だ。エリシア程度のヒーリングでは意味がないし例え一緒にきた神官でさえ今の俺の状態を見れば匙を投げる。

火傷は兎も角、貫通撃という奴は本当に手の施しようがないからだ。

ヒーリングという奴はLPの回復は勿論だが傷の回復に作用する。しかし傷口が貫通している場合、延々とLPが減り続けていくので例えヒーリングLv3でさえ完全回復には数十分の時間が掛かる。その間ずっとヒーリングLv3を使い続けなければいけない訳だから、どう頑張っても先にMPの方が尽きる。

もし貫通撃をヒーリングLv3で治すとしたら10人近い人数を揃えなければいけなかった。

「どうしよう。どうしよう。どうしよう。傷が塞がらないよ!」

エリシアが叫ぶが状況は絶望的。

しかも。

「戦いなさい!エリシア!」

しかも今はまだ戦闘の真っ最中。俺に向けて更にヒーリングを掛けようとしていたエリシアの動きがアリサの声でピタリと止まる。

「でも・・・」

「負傷者は扉付近まで後退させて神官に任せない!」

「でも。でも!」

「貴方は騎士団の一員でしょう!」

「・・・」

歯を噛みしめてエリシアは立ちあがった。そして俺を周囲で待機していた者に任せてドラゴンの方へ向って歩き出した。

「・・・」

俺はその様子を床を引きずられるように移動しながら見ていた。

戦局は劣勢のままだった。

俺の方には神官が張り付いてヒーリングを掛け続けてくれている

もう残り少ないLPの俺の元へ風が吹き込んでくる。

「嫌だ。嫌だ！！死なないで！！エルト！！」

俺にしがみ付いてくる女の声。

「嫌だ。嫌だよ！！私を一人にしないで！！」

この女の名前は　アリサ。

「あ、アリサさん？」

突然戦闘を放棄してエルト君の元へ翔け付けたアリサさんにも驚いたが、その取り乱し方にはもつと驚いた。

「エルト！エルトオ　　！！！！」

今にも死にそうなエルト君の胸に縋りついてワンワン泣き始めた。アリサさんとエルト君。

なんとなく知り合いつばいとは思っていたけれど、ひよっとしたら私が思っているよりもずっと深い関係だったのだろうか？

「煩いな。騒ぐな。鬱陶しい」

でも取り乱すアリサさんとは対照にエルト君はいつも通りの対応だった。

「まだ！まだ間に合うわ！」

「・・・」

「早くオート・デイフェンサーを！」

オート・デイフェンサー？

私にはその言葉の意味が分からなかった。でも、ひよっとしてそれがあればエルト君は助かるのかもしれない。

なのに　。

「やなこった」

エルト君はやっぱり拒否した。

「ど、どうして!?!」

「あれはもう捨てたんだ。二度と使ったつもりはない」

「だって。だって、このままじゃ！」

「これも天命って奴だ。諦めな」

縋りつくアリサさんを力なく押しつけてゆっくり目を閉じるエルト君。彼の意味は固いようだった。

「じゃあ。私も・・・ぬ」

しかし、エルト君に泣き縋るアリサさんもまた諦めの悪い人だった。

「じゃあ。私も死ぬ！」

「あいな」

「貴方の居ない世界で私だけが生きて居たって仕方ないじゃない！あの時の誓いに嘘偽りはないわ！」

「・・・」

アリサさんが歌うように詠みあげる。

「汝。その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、

これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

それは遙か昔、まだ人間が地球という惑星で文化を営んでいた時に作られた誓いの言葉。

「ち！」

舌打ちをしたのはエルト君。

そして彼はLPが底を着きそうという状態の癖に身を起こし。

「・・・」

それをまるで分かっていたかのようにアリサさんが、その身を支える。

「良いだろう。誓ってやる。だが忘れるな」

「・・・」

「俺はお前の全てを許す訳じゃない」

「うん。分かってる」

「ち！」

エルト君はもう一度舌打ちをしてから。

「装備選択『聖剣』 エクス・カリバー!!!」

周囲の人間を驚愕させる言葉を吐き出した。

そして、その剣に導かれエルト君の体が光に包まれる。まるでアリサさんのように。

そして光が晴れた時 彼は降臨する。

太陽を模した冠。白銀の鎧に同色の盾。そして純白のマント。

アリサさんが神秘的であつたなら彼は何処までも神々しかった。

Mode・Paladin

騎士の中の騎士 聖騎士の姿がそこにあつた。

オート・ディフェンサーというのはパラディンの冠、鎧、盾のいずれかのHPと俺のLPを同期させ、ダメージを代替わりさせるシステムの事だ。

よって俺の受けたダメージはもつとも使用頻度の低い冠へとダメージ変換されて俺の体には貫通撃のみが残る。

この貫通撃は確かに厄介だが。

「白魔法選択『ヒーリングLv4』」

規定を回復させるLv3までのヒーリングと違ってLv4は問答無用でプレイヤーのLPを全回復させる事が出来る。それは貫通撃ですら例外ではない。

つまり一時的にでも俺が魔法を使える状態でさえあれば俺は俺自身をいつでも回復出来た。

そしてオート・ディフェンサーはそれを可能にした。

「さて」

俺は冷静に現在の状況を確認する。

ドラゴンの方は騎士団が総力を挙げてアリサの抜けた穴を埋めようと躍起になっているが総崩れは時間の問題だろう。

「アリサ。お前まだいけるな？」

アリサのヴァルキリーは盾と兜は失われ鎧も破損は大きいが無事に健在だった。

「俺が動きを止める。その間にお前の全力を叩き込め」

「はい」

アリサは素直に返事をして俺の隣から天井付近にまで一気に舞いあがる。

「総員退避しろ！今からドラゴンは俺が引き受ける！」

これが俺の言葉だったなら騎士団の連中は動かなかっただろう。

しかし今命じているのは聖騎士パラディン。俺の言葉に騎士達は慌てて退避を始めた。

「だ、大丈夫なの？エルト君」

その中で唯一、俺をまだエルトと認識している少女 エリシアが心配そうに声を掛けてくる。

俺は呆れて振り返り 直後に収束されたドラゴンの炎が俺の背中に直撃した！

「エルト君！？」

「なんだよ」

直撃 しただけ。

アリサのヴァルキリーが計12万のHPだったのに対してパラディンは冠、鎧、盾にそれぞれ6万ずつ 計18万のHPを持つ。

収束させようが不意打ちだろうが簡単に破れるHP係数じゃない。故に、俺の全ての行動は攻撃の為に。

「聖騎士スキル発動『光破斬』！！」

パラディンの盾は腕に装着されるタイプなので剣を 『聖剣』

エクス・カリバーを両手で持つ事が出来る。俺が『魔剣』ソウル・ブレイカーを両手で持っていたように。

それと全く同じ原理で全力でエクス・カリバーを振り下ろす！
剣から光の衝撃波がドラゴンに向かって一直線に放たれ、命中してドラゴンの体がのけ反り　そこへ何十、何百という光の衝撃波が叩きこまれる。

足止めというには過剰過ぎる攻撃群。

「行きます」

そして、勿論アリサはそれを知っていた。

「戦乙女スキル発動『流星撃』！！」

今まで性に合わない足止めなどという役割の為に使えなかったヴアルキリー専用のスキルを持って天井からドラゴンに向かって高速で降下する。

その勢いを殺さないまま槍を前に構えて　突撃した！

まともな真芯でドラゴンを捉え、そのまま貫いてしまうのではないかというほどの強いチャージ。

しかし本当にアリサがドラゴンを貫いたのかどうかは分からなかった。

何故ならアリサのチャージは一度では終わらなかったから。俺の光破斬と同じように何十、何百と連続でチャージされ続け　アリサが俺の隣に戻ってきたときには粉塵がドラゴンを隠してしまっていた。

「やったか？」

「恐らくは。しかし相手が竜種である以上確実とは断言出来ません」

「念の為、トドメを刺しておくか」

俺は聖剣をドラゴンの居るであろう辺りに向けて、丁度十字架を掲げるように構える。

「聖騎士スキル奥義『グラウンド・クロス』！！」

そして十字の閃光を打ち出した。

圧倒的威力の十字架はドラゴンは元より周囲の粉塵ごと全てを吹き飛ばした。

第三章（後書き）

はい。タイトル通りPとVが揃いました。
バラディジュアルキリー
ネタバレ早。

第四章

電腦世界において結婚という物には二つの種類がある。

一つは現実世界と同じように二人で誓いを交わして夫婦になるというものだが、この場合、特に誰かに申請したり登録する必要はない。周囲の知り合いに自分達は結婚したとでも言っておけば十分結婚したと認められる。

もう一つはシステム上の結婚だ。基本的に電腦世界においてダンジョン内に入った時に見えるLPゲージ以外は他人のステータスを覗き見る手段はない。公開するにしても自分の口で自己申請する程度の物。

その守秘を結婚というシステムは覆す。

両者の合意の元に互いのデータを共有し合い、全ての情報を相手にオープンし続ける。更に所持しているアイテムやお金まで共有の財産として扱われる事になる。

昔は 第一世代が電腦世界に入ったばかりの頃は、この結婚システムも頻繁に行われていたのだが、しかももう一つのシステムの存在がシステム結婚の存在を遠ざける事になった。

離婚システム。

システム上結婚した男女が別離を決意した時の為に用意されていた物なのだが、この条件が悪用される原因になった。

結婚は両者の合意によって成立するが離婚に関しては男女の内どちらかが申請して決定してしまえば成立してしまう。

その為、共有した財産を自分側のウィンドウに持っていった上で離婚を宣誓するという詐欺が多発した。

結果。結婚システムは急速に廃れていき今では実際に結婚する人は居なくなっていた。

俺とアリサが結婚したのは4年前。

俺がまだ16の時。そしてアリサは17だった。

昔の地球という惑星では男女が結婚するには男は18、女は16以上でなくてはならなかったらしい。それは実は電脳世界でも変わりはない。

しかしシステム上の結婚というなら話は別だった。

片方がもう一方のシステムウインドウに対して求婚するコマンドを送る。それを相手が了承すれば結婚成立だ。

誰に何を言わなくても両者はその瞬間から夫婦であり、電脳世界において誰はばかることなく公言出来る関係になる。

しかし俺とアリサはその関係を結びながらも、その関係を隠さなくてはいけない立場に居た。

騎士団。

それは15の時に16のアリサを伴って「俺が」作った組織だった。正確には俺とアリサ、そしてもう一人。当時俺の親友であり現在の騎士団の団長を務める男の3人で作った組織だった。

今にして思えば順調とは無縁の組織だった。

作った当初はあつちもこつちも問題だらけ。一つ解決することに二つ問題が起こる。まさにそんな組織だったのだ。

しかし解放軍の怠慢に不満を持つ者が徐々に集い始め、組織としての形態が整い始め、そして解放軍を抜き去った時、騎士団は俺の想定していた組織とは根底を覆してしまった。

本来、俺が作りたかったのは解放軍の不甲斐なさを払拭する組織でも、ダンジョン攻略の為に完全に形骸化した組織でも無かった。

唯、俺はアリサと親友。タナトと何かがしたかった。

それだけの為に作った組織だったのに、いつの間にか周囲の波に飲まれて本当に目的を見失っていた。

だから18の時、俺は騎士団を抜けた。

勿論、アリサも連れて行くつもりだった。

けど彼女は頑なにそれを拒んだ。

「私達が作った組織なのよ！私達が責任を取らずに勝手に居なくなってしまうなんて無責任じゃない！」

話し合いは平行線を辿った。
今にして思えばアリサはきつと俺達で作った居場所を失いたくなかったのだろう。

しかし当時の俺、そしてアリサは相手が分かってくれないという状況に焦れて頑なに我を通してしまった。

結果、俺達は別離した。

それでも離婚はしなかった。

だから 50層のあの通路でシステムは俺達に反応したのだろう。あのイベントの条件はきつと『結婚した男女が隣り合って通路を歩く事』だったのだと思う。

「それじゃエルト君とアリサさんって・・・」

「現在進行形で夫婦って事になるな」

隠す必要はないが隠していた事実を俺 俺達はエリシアに語っていた。

「まあ夫婦と言っても当時は特に忙しかったし夫婦らしい事なんて何もしてなかったけどね」

アリサが俺の隣で白々しくすつトボケた事を言っている。多分、後輩であるエリシアに自分の過去を話す恥ずかしさを誤魔化しているのだろう。

「それで？」

「え？」

「結局二人は寄りを戻すんですか？それとも、このままの状態を続けるの？」

エリシアの直球の質問にアリサがたじろぐ。

「わ、私としては寄りを戻してもあげても良いんだけど、この人がどう思っているかによるわ」

「・・・」

ま。アリサのこういう言い方に当時の俺は耐性がなくカチンと来てしまったのも事実だ。

「俺は騎士団に戻るつもりはない。というか、もう俺の席なんて残ってないだろうし」

「む。そんな事無いわよ！貴方がその気になつたらいつでも受け入れられるように、ちゃんと貴方の席は残してあります！」

なんとというか相変わらず人の話を聞かない奴だ。

「お前は相変わらず騎士団を抜けるつもりはないんだろう？だったら話は二年前と同じく平行線だ。前ほどお前を避けるつもりはないがお互いの立場が違いすぎる。寄りを戻すにしても別居状態だろう」「そ、そんなのダメ！」

俺の出した結論にアリサは大声で拒絶する。

「夫婦はちゃんと一緒に居なくちゃいけないの！ちゃんと誓ったじゃない！」

「……」
あの時は滅茶苦茶嫌がっていたくせに、実は物凄く嬉しかったのかよ。この女。

「だ、大体、私が騎士団の寮で暮らす羽目になったのは貴方のせいなんだからね」

「は？」

何で今そんな話に？

「貴方の荷物が騎士団の寮にあるから出るに知られなくて、だから私が預かる為に騎士団の寮に入るしかなかったんじゃない！」

「……」

いや。アイテムウィンドウがあるんだから持って出れば良かったじゃん。

「だ、だから……」

「？」

「だから私が貴方の家に行ってあげるわよ！」

「ああ」

そう言う話に繋がったのか。ちょっと強引過ぎるけど。

騎士団の方は50層の攻略の大きく貢献したという事でアリサに1週間の休みが与えられていた。正確に言うとアリサが強引に休みを分捕ってきたんだと思うが。

そうしてアリサは俺の所へ強引に引越しを進めてきた。

「ここが貴方のお家？」

「元々一人で住む為に建てたんだ。狭くても文句言うなよ」

電腦世界では木や石にしても全てデータで出来ている為、切ったり壊したりする事が出来ない。その為、自力で家を建てたりする事は出来ないのだがNPCに一定の金額を支払う事で空いている土地に家を建てる事が出来る。

ちなみに家を建てる為の最低金額は1000万クレジットだったりする。

「そうね。確かに一人で住む分には十分かもしれないけど二人で暮らすには少し手狭かな？」

アリサは俺の家に上がり込み勝手に部屋の中を見聞していく。

「ここが寝室？」

「見れば分かるだろう」

アリサが注目してきたのは狭いベッドの置かれた一室。

「これは邪魔ね」

そして何を思ったかアリサはおもむろにアイテムウィンドウを開くと置いてあったベッドをウィンドウの中に収納してしまった。

「おい」

「代わりにこれを設置と」

そして更にアイテムウィンドウをいじると今まで小さなベッドがあった位置にドン！とどでかいベッドが現れる。

「・・・」

酷く見覚えのあるベッド。新婚時代にアリサに懇願されて購入したダブルベッドだった。

「お前、まだこんな物持っていたのか」

「これだけじゃないわ。私の私物に関しては何色も買い替えたりしたけど二人で共同で使っていた物は何一つ捨てていないわよ」

「へえ」

この女、澄ました顔して未練タラタラだった訳か。

「さてと」

アリサは何故か異様に張り切っていてアイテムウィンドウから更にシートや何やらを取り出すと丁寧にベッドメイクを始めた。

「ねえ。ねえ」

「ん？」

その様子をボンヤリ眺めていたらベッドメイクを終えたアリサがベッドに腰掛けて俺に意味ありげに話しかけてきた。

「座つてよ」

「ん？ああ」

促されて俺はアリサの隣に腰を下ろす。

「あれからどうしてた？」

アリサの質問。多分、アリサと別れてからの俺の動向を聞いているのだろう。

「知っているだろう？俺はシングルですとダンジョンの攻略を進めていた」

「うん。でも聞きたかったの。貴方ほどの人が何故ずっとシングルでダンジョンに入っていたのか。貴方がその気になればいくらでも組みたいって人は居る筈よ」

「・・・」

多分アリサは俺がこう答える事を期待しているのだろう。

「お前以外の誰かと組むつもりはなかった」

「」

嬉しそうに俺にもたれかかってくるアリサ。ま。エリシアの事を聞かれたら少しばかり面倒だったけど。

俺とアリサが出会ったのは俺が13の時だ。

正確にはダンジョンの攻略に乗り出そうとしていた少年であった俺が一人で入る勇氣を持ってなくて同じ年の少年を誘った事がきっかけだった。

少年の名はタナト。

現在の騎士団の団長となった男で当時の俺にしてみれば頼りなさそうにダンジョンの前で佇んでいた少年Aだった。

しかし俺と同じく一人でダンジョンに入る事を躊躇っていたタナトと俺は妙に馬があつた。直ぐに親友と呼べるほどに親しくなるほどに。

その後で紹介されたのがタナトの幼馴染　アリサだった。

出会った頃のアリサは非常に御節介で過保護な女だった。勿論、俺に対してではなく幼馴染であるタナトに対してだが。

そして同時に俺に対しては妙に棘のある女だった。

後に聞かされた話だが、どうやら俺がタナトに悪い遊び（ダンジョン攻略）を教える不良に見えていたらしい。

そう言う訳で俺とアリサは出会った当初から相性が悪かった。

何かに付けては俺に突っかかって来るし、皮肉は言ってくるし、時には実力行使でタナトから引き剥がそうとしてくる。

そんな俺とアリサの関係が変わったのは俺が14になったばかりの頃。ダンジョンの攻略はやっと11層に辿り着いた頃だ。

俺とアリサでアリサの実家の地下室の掃除をアリサの親から頼まれた。タナトは当時ダンジョンの外ではあまり健康的とは言えない少年だった為か、過保護なアリサがタナトの代わりを買って出たのが原因だったと思う。

今振り返ってみれば多分電腦世界の複雑な機構が生み出した一緒のバグだったと思うのだが掃除を終えた俺とアリサが外に出ようとした時、地下室から出る為の唯一の扉が開かなくなっていた。

押しても引いても開かない。勿論、破壊するなんて出来ない扉だ。おまけにデータ上遮られた向こうの音は一切響いて来ない。

完全に俺とアリサは閉じ込められる事になった。

勿論、閉じ込められたアリサは当然のようにギャーギャー騒いだ拳句、俺を責めた。俺としても当時はガキだった為に大人の対応など出来る筈もなくアリサの罵詈雑言に対して言い返した。

しかし閉じ込められた時間が1日2日と過ぎていく内に俺達の口数は自然と減っていき、ついにはアリサが泣き出してしまった。

泣いた女の対処など当時の俺に分かる訳がない。分かる訳がないが、それでもなんとかしなくちゃいけないという思いは沸き上がった。

だから俺は言った。

『大丈夫だ』と。

根拠など何もない唯の強がりだったが、それでもアリサは俺の言葉信じた。正確には俺の言葉に縋りついた。泣きながら俺にしがみ付いてきて更にワンワン泣いた。

バグが修正されて救助される3日目の夜までアリサは延々と俺の腕の中で俺にしがみ付いていた。

アリサの態度が目に見えて軟化したのは救出された翌日からだ。

まずアリサは、それまで決して賛成的ではなかったダンジョンに自分も行くと言いだした。無論、俺とタナトは困った顔をした訳だがアリサの決心は頑なだった。

結果として俺とタナトでアリサをサポートしながら再び1層から攻略を始める事になってしまった。

アリサの変化はそれだけに留まらなかった。

俺とタナトが親しく話していると不機嫌になるのは前と一緒だったのだが俺がタナトと離れると必ず俺に付いてくるようになった。

以前はタナトの保護者としてタナトが自分以外の者と親しくする事を嫌っていたのだが、どうやら今度は俺がタナトと親しくしているのが面白くないらしい。

気分屋のアリサらしいと言えばらしいのだが、アリサという女は俺の理解を超えるほどに一途な女だったのだ。

ダンジョンの攻略が20層を超え、段々様になってきた俺達は何か自分達に対して称号のような物が欲しいと思った。

そこで考え出したのが『騎士団』だった。

解放軍に対抗するという思いが無かったとは言わないが、それでも俺は堂々と俺達の関係を表す事に相応しい名前だと思っていた。

騎士団を結成してから1年。

俺達の元へ参入を希望する者達徐々に表れ始める。

俺のシステムウインドウにアリサから唐突に求婚があったのは、その時だった。

「何で俺？」

当時のアリサの立場からしてみれば俺よりもむしろタナトへ求婚を迫るのが相応しい立ち位置だった筈だ。

「エルト大丈夫だって言った。エルト私を護ってくれて言った」

「・・・」

「私を見てエルト。私を一人にしないで」
騎士団として仕事に忙殺され始めた俺に対して寂しさを覚えたアリサの行動だった。

俺の心情としては勿論、複雑だった。

アリサは俺に求婚してきたが恐らくタナトもアリサに特別な感情を抱いているだろう事は想像に難くない。ここで俺がアリサの求婚を受けてしまえば騎士団は崩壊するかもしれない。

「・・・」

でも俺がアリサの求婚を受けなくても崩壊するかもしれない。

何故なら俺達3人で始めた騎士団なのだから。

俺がタナトとアリサ、どちらかしか選べないのだとしたら 俺はアリサを選んだ。

タナト『も』アリサに特別な感情を抱いている事は知っていた。それはつまり既に俺の中でもアリサの存在は大きくなっていったという事。

アリサを拒絶する事は俺には出来なかった。

「何を考えているの？」

ベッドで横になる俺に自身の体を絡みつかせるように抱きつきながらアリサが訪ねてくる。

「昔の事。お前と出会った時の事とか」

「え〜。あの時の事はあんまり思い出したくないよ。だってあの時の私って嫌な女だったし」

「一応自覚はあったのか」

「だってエルトの事を敵だと思っていた頃の話だし」

何となくそうだとは思っていたが実際にそう言われると少しショックだった。

俺のそんな心情など関心がないのかアリサは話は終わったとばかりに俺の胸に自身の頬を摺り寄せてくる。

「えへへ。エルトの匂いだ」

「お前って本当、他人の目がないところでは甘えん坊だよな」

「もう私を離しちゃ嫌だよ。ずっと私の傍に居てね」

「はいはい」

投げやりに返事をしたにも拘らずアリサは嬉しそうに俺を抱く手に力を込めた。

アリサ曰く。彼女にとって一週間の休暇はあった言う間だったらしい。

休暇が終わって騎士団に出向かなくてはならない朝、アリサはぶーたれた。

「行きたくない。もっとエルトと一緒に居たい」

散々文句を言いつつ出かけて行ったが彼女の表情に一週間前まであった陰りはなく肌も妙にツヤツヤしていた。

「おはようございます」

きりつとした表情で休暇を終えたアリサさんが騎士団の領内に入ってきて挨拶をしていた。

「・・・」

妙に肌がツヤツヤしている事が気にかかるけど。

正直に言えば複雑な気分だ。別に私はエルト君に気があったつもりはないのだけど、ああいう幸せなアリサさんを見ると 複雑だ。

「おはよう。エリシア」

「お、おはようございます。アリサさん」

「どうかした？」

「いえ。幸せそうだなあ〜って」

「そう？これでも十分気分は憂鬱なつもりなんだけど」

「・・・」

この人はどれだけエルト君が好きなのだろう？

「正直意外でした。アリサさんは団長の事が好きなんだと思ってましたから」

「タナト？う〜ん、別に嫌いではないけど昔から知っているしね。

どっちかと言うと弟って感じがして恋愛対象としては今一かな」

「そ、そうですか」

ダメだ。これ以上この人の幸せオーラに包まれていたら私の方がパンクする。

「そ、それじゃ私は仕事があるので」

「ええ。頑張つてね」

ゲンナリして私はアリサさんの傍を離れた。

アリサさんには仕事があると言ったけれど正直な話、今の私は手持ち無沙汰だ。

懸念であった50層の攻略が完了してからは54層までの緩慢な攻略になる為、ダンジョンの攻略は必須ではなくなつてレベルの低

い団員達へ優先的に回されている。

その為、私のような高レベルの者は雑務で忙殺されてしまう。

「……」

「退屈そうだね」

「あ！こ、これは団長。おはようございます」

執務室でボンヤリしていたらいつの間にか部屋に入ってきていた団長に声を掛けられて私は慌てて挨拶をする。

「事務仕事は退屈かい？」

「い、いえ。でも私にはダンジョンの攻略の方が性に合っていますから」

「それは頼もしいけれど新しい人材を育てていく事も重要な仕事だよ」

「え。ええ」

騎士団、団長タナト。アリサさんの幼馴染で騎士団の創設者の一人。ダンジョン内での実力は折り紙付きだがダンジョンの外の彼は正直「頼りない」と思ってしまう。そんな外見の持ち主だった。

「エルトに会ったそうだね」

その団長が唐突に話を変えてきた。

「え？ええ。ダンジョン内でパーティがピンチの時に助けて貰って」

「彼は元気だったかい？」

「え？ええ。元気そうでしたけど」

そんな事は私じゃなくてアリサさんに聞けば良いのに。いや。ひよつとして彼も複雑な心情なのだろうか？何と言っても幼馴染を親友に取られた訳だし。

「実は今、50層のガーディアン戦の報告からエルトを騎士団に迎え入れてはどうかという意見が多くてね。僕としてはエルトに戻ってきて貰えるなら大歓迎なのだけど彼は戻ってきてくれると思うかい？」

「えっと。何故私に？」

「僕やアリサはエルトに取って身内に近いからね。僕達を除いて騎

士団内でエルトと交流があったのは君だけらしいからね」

「はあ」

エルト君の騎士団復帰か。

「多分、難しいと思います。アリサさんとは復縁したようですが騎士団その物へ確執があるっぽい雰囲気でしたから」

「やはりそうなるか」

私の答えを予想していたのか団長は腕を組んで唸る。

「そこで君に一つお願いがあるのだけど良いかな？」

「え？」

なんとなく猛烈に嫌な予感がした。

「なあ」

アリサが騎士団の方へ出向いて行っている間、俺はいつも通り単独でダンジョンの攻略に性を出している訳だが。

「いつまでそうやって俺にへばりついているつもりだ？」

「う。私としても本意なんだけど極秘任務の為にやむを得ず」

俺の背後には付かず離れずの位置にエリシアが着いてきていた。

「俺の傍に女を張りつけるような事をアリサが望む筈ないからタナトあたりの差し金か？」

「う」

「一応忠告しておくが帰ったらアリサに言っておくからな」

「そ、それは困る、かも」

こういう隠密な任務に向いていないのかあっさり根を上げ始めるエリシア。タナトがどういう意図を持って彼女を俺に付けたのか知らないが、あまり真つ当な任務とは思えない。

撒くか？

「.....」

一瞬そう思ったがタナトが送りつけてきたのだとしたら何か意味

があるのだろう。あいつはダンジョンの戦闘に関しては俺やアリサに及ばない所があったが頭脳労働をさせたらピカーの実力者だ。その意味で俺はタナトの意図　俺にエリシアを張り付ける意味を考えてみる。

監視　をするほどに俺は騎士団に知られてはならない動向はしていないつもりだし、まさか俺とエリシアのレベル差で俺の護衛のつもりじゃないだろう。

「まさか」

ツラツラと考えていた俺は『その考え』に行きつくにあたってドンドン自分の疑問が紐解かれていくのを感じる。

まさか　タナトの奴ここまで考えての行動だったのか？

「どうしたの？エルト君」

「いや。なんでもない」

どちらにしてもダンジョン内ではどうにもならない話だ。俺は余計な思考を振り払って未登録マップへと足を進めた。

ダンジョンから外に出た俺は少し無理を言っただけでエリシアに付いて騎士団の領内へと入って行った。

「良いの？アリサさんが待ってるんじゃない？」

「問題ない。俺の考えが正しければアリサも残っているはずだ」

事実、本来なら部外者立ち入り禁止の領内へ俺が来る事が事前に報告されていたのだろう。殆ど素通りするように領内へ入る事が出来た。

「それで何処に行くの？」

「勿論タナト・・・団長の執務室だ」

「？」

エリシアは首を傾げていたが俺を案内して執務室をノックすると直ぐに入室の許可が下りた。

「エルト？どうしてここに？」

部屋の中には予想通りタナトとアリサが俺達を待ち受けていた。

「やあ。いらっしやいエルト。こうして直接会うのは久しぶりだね」
「そうだな」

本当に久しぶりに会うというのにタナトは最後に会った2年前と全く変わっているように見えなかった。

「ここに来てくれたという事は僕の送ったメッセージはちゃんと解読してくれたみたいだね。流石エルトだ。嬉しいよ」

「俺はお前の掌の上で踊らされているようで気持ち悪いくらいだ。一体どこからがお前の目論見通りだったんだ？」

「勿論、最初から最後までさ」

「最初から？」

それは一体どの『最初』だ？

俺がアリサと再会し時からか？それともエリシアのピンチを助けた時か？

「僕が君と出会ったときから、だよ」

「！」

正直、鳥肌が立って思わず絶句した。

「ねえ。どういう事？」

そんな俺達の応酬に自分が仲間外れにされたと思ったのかアリサが割り込んでくる。

「端的に言ってしまうえばエルトは今日から騎士団に復帰するという事さ」

「え？そうなの？」

真つ白に染まりかけていた思考を俺は無理矢理叩き起こして通常の状態に戻す。

「不本意だが俺が騎士団に入る事のメリットと入らない事にデメリットにつり合いが取れなくなったんでな」

「エルトが騎士団に入るメリットって何？」

「平たく言えば俺とアリサの安全を保障されるって事だ」

「？」

「俺の現状は今までのシングルプレイヤーとしてやってきた時から

変化してしまっている。具体的に言えば俺のもつ聖剣の話だ」

「でも、あれはタナトが緘口令をしいたから外部に話は漏れない筈じゃない？」

「あの場に何人の人間がいたと思っっているんだ。例え騎士団がどれだけ強固に口止めしたとしても必ず話は漏れる。実際あの場に居たのは騎士団だけじゃ無かったしな」

あの場に居たのは騎士団と高レベルのパーティーを組むプレイヤー達だ。

「そして今の現状で俺達の持つ聖剣と神槍を喉から手が出るほど欲しがっている奴らが居る」

「あ。解放軍」

俺の説明に逸早く答えを出したのはエリシアだった。

そう。遅々として進まない攻略、不満を募らせる住民、騎士団に出し抜かれた事実。現状の解放軍に取って聖剣と神槍は何をしても手に入れない一品の筈だ。

「でも私は随分前から神槍の事を公開していたけど別に何もされなかったよ？」

「それはお前が騎士団の領内で生活していたからだ。解放軍だって正面から騎士団と事を構えるつもりはないんだろ。それに一度ダンジョンの中に入ってしまえば無敵の力を持つヴァルキリーやパラディンに手を出そうなんて奴が居る訳がない」

確かに俺やアリサはダンジョン内で無頼の強さを誇るが、それもダンジョン内限定の話。ダンジョンから一步でも外へ出てしまえば俺もアリサも一般人と変わらない強さしか持っていないのだから。

「だが現在の状況は聖剣を持つ俺の家に神槍を持つアリサが居座っている状態だ。こんな美味しい状況を解放軍のハイエナどもが見逃すはずがない」

数という暴力で俺達を無理矢理拘束してダンジョン内に連れ出して装備を剥ぎ取る。解放軍の倫理なら何の問題もなくやってのけるだろつ。

「でも私がエルトの家につ越してから一週間も経つのに何も起こつてないよ?」

「だから、それがタナトのくれた『プレゼント』だったんだよ」
「あ」

アリサへの一週間の休暇。その意味するところはアリサが単純に休めるだけではなく騎士団の面子が俺の自宅周辺でアリサと俺の護衛をしていたのだ。

だから解放軍の連中は手を出してこなかった。否、手を出せなかったというべきか。

「だから今後も俺達が安全に暮らして行く為には俺が騎士団に入つてしまうのが一番手っ取り早い。騎士団の領内で暮らす分には解放軍も早々手は出して来ないだろうしな」

「それはそうかもしれないけど、良いの?」

俺の心情を理解しているアリサは不安げに俺に問いかけてくるが。

「良いも悪いも俺の心情を除けば良い事だらけだからな」

「?」

「まず俺が騎士団に入る事で当然さつきも言ったように安全が確保されるだろう?」

「うん」

「それから当然俺が参戦するとなればアリサと組まされるだろう。というかアリサが組むように仕向けるだろう?」

「・・・そうかも」

「その上、俺達は今まぎれもなく夫婦な訳で当然部屋も一緒になる訳だ」

「・・・」

俺が一つ一つメリットを話して行くとアリサの顔から不安の色がドンドン消えて笑みが浮かんでくる。

「良いね、それ エルト騎士団に入ろうよ」

「・・・」

ま。言つと思つたけど。

「で、だ」

俺の後を付いてくるエリシアを俺の護衛かも？と考えた時、俺の中で全ての線は一本に繋がったと思つていたのだが。

「最初の質問に戻るが俺とアリサの事、何処までがお前の筋書き通りだったんだ？」

「さつきも言つただろう。最初から全部さ」

俺の質問にタナトはにっこり笑つて答えた。

「エルトと初めて会つた時、君ならばきつと解放軍を超えて先頭に立つに相応しい指導者になると思つていた。だからアリサを紹介したんだ。君の伴侶としてアリサ程相応しい女性も居ないだろうからね」

「・・・」

「数年で君は僕の思つていた通りに頭角を現しアリサをも物にして見せた」

「俺が騎士団を抜けたのは誤算だったか？」

「いや。君ならばきつと変わつていく騎士団と同調出来ずに去つていくだろうと思つていたよ。だからこそアリサとくっ付けて、その上でアリサを騎士団に引きとめたのさ」

「！」

待て。こいつ何を言つて。。。

「例えどんなに引き離されようともアリサは君を忘れない。どんなに本心を捻じ曲げようとしても一度愛した君を忘れるなんてアリサに出来る筈がないんだ。彼女はそう言う女だからね」

「・・・」

「そしてアリサがそう思つている限り君はいつか戻つてくる。アリサが君を忘れられないように君も決してアリサを見捨てる事が出来ない男だからね」

「・・・」

「質問は以上かな？」

「お前、怖い奴だよ。俺なんかよりもずっと」

「ありがとう。最高の褒め言葉だよ」

「・・・」

俺は自分で思っていた以上にタナトの掌で踊っていたらしい。

第五章

結局、俺はタナトの目論見通り騎士団に入る事になりアリサもとんぼ返りで騎士団の領内に戻る事になった。

「多分だけどさ」

その引越しの最中にアリサが自信なさげに話を振ってきた。

「タナトの言った事は全部が全部真実じゃないと思う。要所要所に真実が含まれていたかもしれないけど大部分はきつと後付けの理屈だと思う」

「それでもきつとあいつなら全部を真実に変えて見せるさ。あいつを敵に回すのは正直得策じゃない」

「そうだね」

ちよつとだけ力を抜いて俺に寄り添って来るアリサ。

今日から俺は騎士団、第二正規隊、副隊長として活動する事になった。

「ちよつと待て」

なった 筈なのだが。

「何だ、これは？」

「何ってお仕事。急がなくても良いけど今日中には片付けておいてね」

「・・・」

アリサが提示したのは机一杯に広がる書類の山 ではなくウィンドウに表示される羅列の山だ。 電脳世界において基本的に書類とか書物とか言ったものは存在しない。

「これを今日中に？」

「うん」

アリサは嬉しそうに頷くが本気で今日中に片付けるなら超ハイペ

「スで働いて何とか間に合うかどうかと言った量だ。

「・・・ダンジョンの攻略は？」

「それが終わったら一緒に行こうね」

ニコニコ笑っているアリサに威圧されて俺は渋々ウィンドウに手を伸ばして仕事を開始した。

当然、その日はダンジョンに入る事すら出来なかった。

「アリサさん最近またご機嫌ですね」

「ん 楽しいよ」

最近のアリサさんは会う度に鼻歌を歌っているくらいご機嫌だ。理由はなんとなく察しが付くけど。

「今日もエルト君に仕事を押し付けてきたんですか？」

「だってエルトって思ったより有能なんだもん。最初の内はちょっと意地悪して根を上げたら助けてあげようかなって思ってたんだけど凄いいペースで仕事片付けてくれるしさ」

「・・・」

この人、なんだかドンドン地が出てくる。前は団員の前では取り繕う事くらいしていたのに。

「その内エルト君ストレスで潰れちゃいますよ？」

「男にとって一番のストレス解消法って何か知ってる？」

「・・・」

「だからエルトは絶対大丈夫よ」

悪女だ。ここに紛れもない悪女がいる。

そんなエルト君に対しては御気の毒さまとしか言いようのない状況が、その後数日続いた訳だけどアリサさんの言うようにエルト君のストレスはちゃんと解消されていたのかエルト君は逃げ出す事無く渋々仕事を片付け。

「退屈」

最初に根を上げたのは寄りによってこの人だった。

「自分でエルト君を動けなくしておいて今更それですか」

勿論アリサさんだ。

「考えてみたらエルトが仕事を手伝ってくれるのは楽で良いんだけど私としてはエルトと一緒に何かがしたいのよ」

「要するに飽きたんですね」

「うん」

素直に頷くアリサさん。この人は本当に。

「それじゃエルト君と一緒にお仕事すれば良いじゃないですか」

「それは嫌」

我儘だ。しかも超弩級の我儘だ。

「やっぱりエルトと一緒にしたい事と言ったら家でイチャイチャするとかダンジョン探索かなあ」

「・・・」

ダンジョン探索は兎も角、私の目の前でイチャイチャされるのだけは勘弁だった。あのオーラをふりまかれたら正直私の方が持たない。

「でも、お二人は今解放軍に狙われているわけでしょ？団長が許可を出してくれますかね」

「何を言っているのよ。エリシア」

「？」

「だからこそ貴方に話しているんじゃない」

「・・・」

前に団長と話した時にも思ったけど激・嫌な予感。

「お前って悪い女だよな」

俺は呆れながら俺の腕にしがみ付きながら隣を歩く女

アリサ

に言った。

「そう?」

「絶対そうだ」

そりゃ俺としても退屈な机仕事から解放されて嬉しいが身代わりにされたエリシアとか騎士団の領内から脱出する為の抜け道とか、アリサは一々抜け目がない。

「だってエルトとお出掛けしたかったんだもん」

「・・・」

本当、悪意が無いのが一番性質の悪い悪女だ。

ま。俺達がどう抜け駆けしたつもりになっても、きっと抜け目のないタナトの事だ。恐らく俺達が抜け出す時期を想定して解放軍に牽制してくれた上でダンジョンまでの道のりに護衛でも配備されているのだろう。

俺の予想通りだったのか杞憂だったのか知らないが俺とアリサはあっさりとダンジョンへと到着した。

「白魔法選択『ゲートポイント』」

白魔法『ゲートポイント』はダンジョン内から出口までの扉を作る魔法だが、この白魔法にはもう一つの使い道がある。入口から自分の指定した任意のポイントまでの扉も繋ぐ事が出来るという点だった。

基本的に最前線に立つ攻略者達は、この魔法か、この魔法と同じ効果のあるアイテムを使う事により攻略に掛かる手間を大幅に減少させている。

ま。ゲートポイントはダンジョンの任意のポイントに設定できるのに対してアイテムは必ず入口か出口に出るという相違点はあるがゲートポイントも入口か出口以外に設置する奴は多くない。

任意で選択した場所にモンスターが群れをなしていない保証など無いのだから。

だから多くの者が出入りする為もつとも危険の少ない入口や出口

に設定しておくのがセオリーだ。

「私、51層に来るの初めて」

「俺だって前はタナトの事で気が散っていたから殆どマップ情報を更新してない。出会ったモンスターも極少数だしな」

もう51層が解放されて数週間が経つというのに出遅れた俺達は、しかし焦りのようなものは感じていなかった。

パラディンやヴァルキリーがあるという安心感は勿論今までもあったのだが、今はそれよりも隣にアリサが居る事が心強い。どうしてだろうな？

別に今までだって特に不安を感じていた訳でもないのにアリサが隣に居るだけで妙に安堵して、この状況を手放したくないと思っっている俺が居る。

「初めてくる階層でこんな事を言うのも変な話だけど・・・」

「？」

「なんだか、ほっとするね」

そして、どうやらそれはアリサも同じようだった。

「はあ！」

敵の一つ目巨人 サイクロプスの振りおろしてきた石の棍棒に合わせて俺は自前の魔剣ソウル・ブレイカーを下から叩き上げる。

巨人という特性から相手の攻撃を受けるだけでは力負けしてしまう。

その為に俺は下から攻撃という方法を持って敵の攻撃の威力を相殺して受け止める。それと同時にソウル・ブレイカーの武器防具破壊の効果が発動して石の棍棒を粉々に破壊した。

「やあ！」

そして当たり前のように俺がその場を退いた直後にアリサの持つ魔槍ホーネットがサイクロプスの唯一つの目玉を正確に貫いた。

「せい！」

悲鳴を上げて蹲る巨人の頭にすかさず俺がソウル・ブレイカーを

叩きつけてトドメを刺す。

戦闘終了。

「お疲れ様」

「ああ。ま。楽勝だったけどな」

「私とエルトのコンビだもの。当たり前よ」

何故俺達がパラディンやヴァルキリーを使わずに通常の装備で戦闘をこなしているのかと言うとパラディンやヴァルキリーは確かに強力だが一つだけ弊害が存在するからだ。

それはパラディンやヴァルキリーの状態でいくら敵を倒しても経験値が一切入らないという事。

事実、前回のガーディアン戦に参戦した者はエリシアを含めて殆どレベルアップを果たしたというのに俺とアリサには一切経験値が割り振られていない。

だから通常の戦闘時には俺達は普通の武器を使ってレベル上げをしなくてはならない。ガーディアンのように経験値が大きい相手の恩恵を得られないという意味においてパラディンやヴァルキリーは一般のプレイヤー達よりも不利な位置に居る訳だ。

もつともピンチの時には切り札があるという意味では通常の戦闘にも余裕が出るのだけど。

「パラディンやヴァルキリーの時にも経験値が入るなら一気にダンジョンの攻略に乗り出すのにね」

アリサも俺と同じ事を考えていたのかポツリと呟いて肩をすくめる。

ま。例え周囲に知れ渡っていたとしても俺としてはパラディンは奥の手に取っておきたいところだ。

「さてと。大分良い時間だしお昼にしましょうか」

「そうだな」

今日は朝からダンジョンに入っているがシステムウィンドウの間を確認すると丁度昼になったあたりだ。

「それじゃお願いね。エルト」

「ああ」

俺はアリサの要請を受けてダンジョン内の開けた空間の床に手を付けて。

「白魔法選択『セイフティ・ハウス』」

その魔法を発動する。

白魔法『セイフティ・ハウス』は指定した場所から半径5メートルの範囲で白い光で作られた安全地帯をダンジョン内に作りだす魔法。文字通り安全地帯なのでモンスター達はこの範囲には入って来れない、というか近付いて来ない。これによって安全にお昼ご飯にしようという訳だ。

ちなみに、その昔解放軍ではこの魔法を使ってガーディアン戦を有利に運ぼうとしたり、階層内に敷き詰めてモンスターを一か所に集めて一気にレベルアップを諮ろうという試みがあったらしいのだが。

「便利だよね、これ」

範囲内で呑気にお弁当を取り出して用意するアリサの言葉とは裏腹に、この魔法は途轍もなく制限が多かった。

まずガーディアン戦への試みだがセイフティ・ハウスはガーディアンには無効だった。というか、そもそもガーディアンの部屋では展開出来ない仕様だった為セイフティ・ハウスを当てにしていた解放軍は大打撃を受ける羽目になったらしい。

次に階層内に敷き詰める為に大量の人員にセイフティ・ハウスを習得させて挑戦した結果、隣接する場所で展開しようとした瞬間、元の位置に展開されていたセイフティ・ハウスが消滅した。どうやら近すぎる場所に展開すると上書きされてしまうらしい。しかも同時展開と認識される距離は普通の人が目視できる距離であれば問答無用で上書きされてしまうという有様。

そう言う訳で未だに解放軍ではこの魔法を習得した奴が大量に居るとい話だ。

俺やアリサにしてみれば便利な魔法なので助かっているのだが解

放軍の中で使っている者は一人も居ないのだそうだ。

「さてと。それじゃ頂きましょう」

「ああ。頂きます」

そして俺達は優雅に昼食を楽しんだ。

余談になるが俺がヒーリングLv4やセイフティ・ハウスなどの白魔法ばかりを習得して騎士スキルを全く取っていない背景には聖騎士スキルの弊害があったりする。

聖騎士スキルを使用する為の前提に『全白魔法の習得』という厄介な条件があったのだ。

その為、俺は誰もがスルーするような白魔法にまで手を出し、そのお陰で騎士スキルは全くノータッチという状況が出来てしまった。俺が『死にたがり』などという不名誉な名前を付けられたのにはこうい背景があった。

「あれ？」

そのアリサの困惑の声は昼の休憩を終えて1時間ばかり51層の探索に時間を費やした時に漏らされたものだった。

「ここって51層だったよね？」

「ああ」

俺もまたアリサと同じ方向に視線を向けて困惑を隠せなかった。

ガーディアンが配置されているのは5の倍数の階層にのみ。当然50層にあった訳だから次は55層にあるのが当たり前だ。

当たり前前の筈なのだが。

「あれってどう見てもガーディアンの部屋の扉だよな？」

「ああ。そう見えるな」

俺達は何故か51層でガーディアンの部屋を発見してしまっていた。

「バグ？」

「それか畏か幻かだな。まさか50層で戦ったばかりなのに51層

でも戦わせるほど大盤振る舞いもないだろう」

「そうだよな。一応確認だけでもしておく？」

「そうだな。扉を開けるだけなら問題ないだろう」

ガーディアンの部屋は一度入ったら扉をロックされて出る事は出来ないが扉を開けて覗き見るだけなら問題ない。要するに部屋の中に入らなければいい訳だから。

そう言う訳で俺達はそれぞれに左右に開く扉を開いて中を覗いてみた訳だが。

「やあ。いらっしやい二人とも。待っていたよ」

「……」

ガーディアンの部屋の中で待っていたのは予想外の人物だった。

「お前こんな所で何やってんだ？」

「言っただろう？君達を待っていたのさ」

そう言っただけで部屋の中央に立つ男　タナトは笑った。

「待っていたって俺達がここに来るかどうかも分からない上に、この部屋に入るかどうか分からないのか？」

「君達ならきつと部屋に入ってくるだろうと思っていたよ」

「……」

俺は完全に普段通りのタナトの言動に触発されて気を抜いてタナトの元へ一歩踏み出して　部屋の中に入ってしまった。

直後、俺達の背後でボタンと扉が閉まりカチリとロックされる。

「……え？」

「ひょっとして閉じ込められた？」

基本的にガーディアンと部屋と言う奴からはガーディアンを倒すか入った人物が全滅するまで扉は開かない。バグでガーディアンが部屋に入ってしまう中にガーディアンが居ない場合当然閉じ込められる。平たく言うと扉を開閉させる条件を満たす手段がない。

「ど、どうしよう」

「何で俺達はこう閉じ込められるネタが多いんだ？」

昔の地下室といひ50層の落とし穴といひ、閉じ込められてばか

りだ。

「大丈夫だよ。今回の君達に何日も拘束されるような暇を与えるつもりはないからね」

「タナト？」

焦るアリサ。呆れる俺とは裏腹に冷静なタナトの声が部屋の中に響く。

「ところでエルト。君は最後の100層に居るガーディアンがどんな奴なのかを想像した事があるかい？」

「何だ？こんな時に」

「君はダンジョンを攻略しようという意欲はあっても現実世界への帰還という欲求は薄い。そんな君でも100層のガーディアンを想像した事があるのかなって思っ」

タナトの言う事は正しい。というか以前に俺がタナトに話した事だ。俺はダンジョン攻略には興味があっても現実世界への興味は薄い。

「一応想像するだけならした事はあるさ。俺自身の手で100層まで踏破するつもりだからな」

「それは素晴らしい。それで君の想像するガーディアンとはどんなものだった？」

「まあ言ってしまうえばラスボスだからな。ラスボスと言えば魔王と相場が決まっている」

「あはは！」

俺の答えに珍しくタナトが声をあげて笑う。

「悪かったな。発想が貧困で」

「いやいや。君ならきつとそう言う想像を働かせているんじゃないかと期待していたんだよ」

「？」

「きつと君ならどれだけヒントがあつたとしても本当の100層のガーディアンを想像するなんて絶対に不可能だと信じていたんだ」

「なんか褒められているんだか貶されているんだか良く分からないか」

「勿論、褒めているんだよ。大絶賛だ」

とてもそうは思えないがタナトが良い笑顔で言うのだから本当に褒めているのかもしれない。

「でもね。現実って奴は時に残酷なものなんだよ」

「！」

唐突に。本当に唐突にタナトの声が氷点下を下回ったのではないかというほど冷たくなり俺は咄嗟に身構える。

「良い反応だ。そうでなくては君を選んだ甲斐がない」

「タナト。何を言ってる・・・」

「装備選択『神剣』天叢雲剣」

「「「な!?!」」」

タナトの言葉と行動に俺とアリサは驚愕の声を漏らす事しか出来なかった。

その俺達の理解を置き去りにしてタナトの体は光に包まれ。

「Mode・須佐能乎とでも言うべきかな？」

その姿は俺達にたった一つの単語を刻みつけた。

「神」

「その通り。この姿は想定しえる可能な限り神に近づけた物だ。当然、能力も君達の物とは段違いの性能だと言って良い」

タナトの姿を素直に見聞するならばタナトの鎧の中心で輝いている宝玉は恐らく八尺瓊勾玉、そして左腕に身に付けている物は八咫鏡だろう。

どんな効果があるのかは分からないが少なくとも俺のパラディン以下という事はなさそうに見える。

「お前、一体いつの間にそんな物を手に入れて・・・」

「やれやれ。僕を信用してくれるのは嬉しいが少しばかり状況判断

「が鈍いんじゃないかい？エルト」

「・・・」

「君の事だ。僕の話からある程度は予想が付いているんじゃないのかい？」

「・・・お前が100層のラスボスだつて事か？」

俺の絞り出すような言葉にタナトはにっこり笑って両手を合わせて嬉しそうに拍手をする。

「その通り。僕、と言うより正確にはこの姿が君達が目指す100層のガーディアンのだ。勿論、今までの者を含めてこれから遭遇する予定であつたどのガーディアンよりも圧倒的に強い事は保証するよ」

疑問は山のようにある。

何故タナトが？とか何故この段階で？とは思ふ。しかし今俺がタナトに一番聞きたい事、聞かなくてはならない事は。

「俺達と戦うつもりなのか？」

「うん。そのつもりだよ」

予想出来ていた答えに俺は歯を噛みしめる。

「理由を挙げるならば君達の持つエクストラウェポンがダンジョン攻略者達の間でのパワーバランスを大きく崩してしまうからだよ。君達の装備は现阶段では強すぎる」

「必要だと言うなら俺は聖剣を捨てる」

「出来ない事は身をもって知っているだろう？」

「・・・」

その通りだった。俺とアリサの持つエクストラウェポンは捨てる事も譲渡する事も出来ない仕様になっている。

こん時点で解放軍が俺達からエクストラウェポンを奪おうとしているのは的外れな訳だが、それは俺達の事情であつて解放軍が納得する理由ではない。

「それじゃ、どうしても俺達と戦うつていつのか？」

「ああ。いや、一つだけ条件を飲んでくれるなら考え直さなくもな

いよ」

「どんな？」

果てしなく嫌な予感がするが一応聞き返してみる。

「アリサを僕に返してくれ」

「交渉決裂だな」

俺は即座に判断してアイテムウィンドウから聖剣エクス・カリバ
ーを選択した。

「冗談じゃないわ！」

アリサもまた激昂して神槍グングニルを選択してヴァルキリーへ
と変身する。

「まあ、そんなにいきり立たないでくれよ」

そう言つてタナトはアリサに向けて手を翳し。

「あぐ！」

瞬間、アリサが膝を付く。

「アリサ？」

「な、何これ？体が・・・重い」

両手を床に付いて必死に立とうとしているようだが重力が何倍に
もなったかのような圧力に贖う事が出来ないようだった。

「僕は神だからね。同じ神属性を持つヴァルキリーに対してはある
程度の圧力をかける事が出来るんだ」

「く」

俺は急ぎアリサの元へと駆け付けようとして。

「無駄だよ」

「！」

高速で回り込んできたタナトの攻撃を反射的に盾を翳して防御し
て。

「な！？」

盾ごと腕を斬り裂かれ、更に勢いを殺しきれずに鎧のHPが半分

以上持つていかれた。

「じよ、冗談だろ」

「言ったじゃないか。僕のエクストラウェポンは君達の物より圧倒的に強いって」

「あぐ！」

更に一撃。冠と同時に額を斬られ、おまけに完全に鎧を破壊されて壁に叩きつけられる。

「・・・」

まずい。今の一撃で俺のLPにまでダメージが通り残りのLPが半分を切っている。これはつまり10秒の行動不能時間を課せられるという事。

「弱いな。エルト。この程度じゃアリサを預けておけないよ」

「こ、来ないで！」

タナトは俺を無視して動けないアリサの方へ手を伸ばし。

「タナトおおおお

「！！！！」

気が付いたら俺は走り出していた。行動不能時間をどうやって振り切ったのかなんて自分でも分からないまま俺は聖剣を手にタナトに迫り、そのまま聖剣でタナトの胸を貫いて。

「え？」

「残念。神属性を持つ僕に聖属性のパラディンの攻撃は通らないんだ」

「あ」

生身の体を斬られ、再度壁際まで吹き飛ばされて叩きつけられた。「かは」

しかも今度のダメージは半端じゃなかった。LPゲージは限界まですり減り生きているのが不思議なダメージ量。

やばい。これは早く何とかしないと。

「……」
「白魔法選択『ヒーリングLv4』」

「……」
「白魔法選択『ヒーリングLv4』!!!」
「無駄だよ。分かっているんだろっ?」

「……」
「確かにヒーリングLv4は問答無用で対象者のLPを全快させる効果があるけれど例外も存在する」

「……」
「死者のLPを回復させることは出来ない」

「……」
「死者?誰が?」

「……」
「ありえない。ありえない。ありえない。」

「……」
「それにしても君達には驚かされたよ。行動不能時間は無視して突っ込んでくるし、現実世界でなら10倍近い重力を体感していた筈なのに駆けつけてくるし、おまけに切れない筈の拘束を素手で引き千切ってくるとはね」

「……」
「……ろす」

「君達を見ていると人間の可能性って奴を信じてみたくなるね」

「……」
「……殺す」

腕の中のアリサをそつと床に横たえて俺は立ち上がる。

俺の手の中には聖剣ではなく魔剣ソウル・ブレイカーの姿。

「うん。正しい選択だ。聖属性では僕にダメージを与えられない。だからランクは落ちても魔剣で僕を攻撃するのは正しい選択だよ」

「……」

タナトの声は既に俺の中に響いて来ない。俺の中を染め上げているのは唯一色の色。

憎悪。

真つ黒なドス黒い感情に身を委ね、俺はタナトの元へ飛び出した!

一合、一合。俺の魔剣とタナトの神剣がぶつかり合う度に火花が散る。

「やるね。流石実戦経験では君の方が一枚上手だ」

「死ね。死ね。死ねえ！」

話なんて聞いちゃいなかった。唯、俺は感情の赴くままに剣をふるいタナトを追い詰めていく。

勝てるなんて考えちゃいなかった。

唯、唯、後から後から湧きあがる憎悪に身を任せ俺は殺意を迷うことなくタナトに叩きつけていた。

頬を何かが流れていく。

涙？違う。赤い涙なんてあるものか。例え瞳から溢れ出ようともし赤いならきつと血だ。そうに決まっている。

俺はその感情の赴くままにタナトを壁際まで追いつめ、神剣を弾き飛ばし、そのままガラ空きの喉元へ魔剣を突き刺す。

「……」
せなかつた。

「どうしたんだい？例え僕の鎧がどれほど強固であろうとも武器破壊特性を持つソウル・ブレイカーなら僕を殺せたかもしれないよ？」

「……」
俺の手からソウル・ブレイカーが落ち、同時に俺の体が崩れて膝を付く。

「……ない」

「何だつて？」

「仕方がない。お前を殺しても仕方がない」

「……」

「アリスが言っていた。俺の居ない世界で生きて居たって仕方がない、と。俺も同じだった。アリスが居ない世界で俺だけが生きていても仕方がない」

剣を止めたのは決して同情は憐憫ではない。唯。

「それに、これ以上お前に殺意を向け続ける事は出来ない」

「何故？僕は君の大切なアリサを殺した張本人だよ」

「それでもお前は俺にとつて大事な人間だ。それにアリサとお前の居ない世界で俺だけで生きていくなんて考えただけでぞつとする」

唯、これ以上タナトに憎悪を向け続ける事が出来なかっただけの話。

「殺せ。アリサの居ない世界ならば俺は生きていても意味がない」

「まあ」

タナトは弾き飛ばされた神剣を拾い上げ。

「君ならきつとそう言ってくれと思っていたよ」

神剣と同時に武具を全てアイテムウインドウに戻した。

「タイムアップだ。エルト、君の勝ちだよ」

「・・・」

「それに、そろそろ彼女が目を覚ます時間だ」

「彼女？」

この場に彼女と表現される人物は一人しかない。しかし彼女は既に。

「あれ？私、何で？」

「！」

聞こえてきた声に俺はゆっくりと ゆっくりと振り返る。

「エルト。私、どうしたんだっけ？」

アリサが 死んだ筈の彼女が身を起して当惑した表情で俺を見ていた。

もどかしかった。

既に体力も底を尽き、LPも0に近い状態では駆け出す事も出来ず、這いずるようにしか移動出来ないのがもどかしかった。

でも直ぐに俺は彼女の元まで辿りつき。

「エルト？」

力の限り抱きしめた。

「え？あの・・・どうしたの？」

アリサがどうして生きているかなんて後で考えれば良い。例えゾンビだったとしても構わない。

「アリサ。アリサ。アリサ。アリサ。アリサ。アリサ・・・」

「・・・」

延々と彼女の名前を呼び続け、抱きしめる腕の力を緩める気配のない俺をアリサはそっと抱き返してきた。

もう二度と彼女を手放す事は出来そうもない。

エピソード

「さてと。そろそろ種明かしをさせて貰おうかな」

延々と抱き合い続ける俺達に対して流石に呆れたのかタナトがヤレヤレと言った感じに話を始めた。

「まずアリサが生きている理由だが君達のLPゲージを見て御覧。他の人間には見えないが君達の関係ならお互いのステータスを見る事が出来るだろう?」

俺はアリサを抱きしめたまま、アリサも俺の背に腕をまわしたまま言われたとおりにLPゲージを確認してみる。

俺のLPゲージは既に3分の1ほどが回復しており、自然回復だったならそれなりの時間が経っている事が分かる。どうやら相当長い間アリサと抱き合っていたらしい。

「あれ?なんか私のゲージの上に書いてある」
アリサの方を確認してみると俺とは違って彼女のLPはほぼ全快しており、その上に彼女の言うとおりで何かの文字が浮いて点滅していた。

不死属性発動中。

「不死属性?アリサが?」

不死属性を持つ者と言ったら。

「まさかアリサは・・・」

「いや。それは違うよ。彼女は第一世代じゃない。むしろ僕や君よりも遅く生まれた存在なんだ」
「遅く?」

それもまた変な話だ。アリサの年齢は俺やタナトの一つ上。それなのにタナトはアリサが俺やタナトより遅く生まれたのだという。

「初めから説明しよう。まずは僕の話からだ」
そしてタナトは語り始めた。

「まずこのダンジョンを攻略しようとしているプレイヤーの目的はエルトのような例外を除けば基本的に100層にあるというアクセス制御端末を目指している。そこにアクセスコードを打ち込み、この電脳世界から再生された現実世界へ帰還する事が大部分の人間の目的になる」

「まあ、そうだろうな」

「しかし実際問題、アクセス制御端末は兎も角この電脳世界を管理しているのは高度な人工智能だ。その人工智能にしてみればダンジョンを攻略しようとしている人間と言うのは滑稽以外の何物でもない。何故なら人工智能は人間にダンジョンをクリアさせる気なんてさらさら無かつたのだから」

「クリアさせる気が、無い？」

「そりゃそうだろう。勝手に人工智能を管理者に仕立て上げ、こっちが必要だと判断したから食料を制限して人間を間引こうとしたら勝手にアクセス権限を使って割り込んでこようとす。それを防ごうと思っただんジョンを作ったら今度は勝手に戦争を始める始末だ。手に負えないよ」

「・・・」

「そう言う訳で管理者である人工智能はとつくに人間に対して絶望していたのさ。一応最低限の管理は実行しているけどダンジョンを攻略しようなんていう人間を本当に最下層まで行かせてあげるほど優しくはない」

タナトの言動。それはまるで。

「もう分かるだろう？そう。僕がこの電脳世界の管理人工智能だよ」

まさしく人口知能そのものだった。

「で。話の続きになるけど50年ほど前に地球再生のアナウンスがあったじゃないか。あれは僕の意図じゃなくて僕を設定した人間が勝手に設定したアナウンスでね。地球の環境がある程度人間に都合

のいい所まで再生したら自動で流れるようにプログラムされていたんだ。勿論、僕の知った事じゃない」

そう言ってタナトにしては珍しく憤慨している様子だった。

「そうして暫く無視していたら今度は人数を揃えてダンジョン攻略を始めるって言っじゃないか。その時点じゃ僕もまだ人間って奴に心の底から絶望していた訳じゃないから少しは期待していたんだけど全然駄目。解放軍の奴らなんか僕の本体であるアクセス管理端末に辿り着かれた事を想像するだけで鳥肌が立つよ」

本当に嫌そうに体を震わせるタナト。今日のこいつはいつにもまして感情豊かだ。

「ま。奴らに関してはどうでも良かったんだ。どうせ放っていても向こう100年経ったって100層まで辿りつける訳無いんだから」
そう言ってからスツと表情を引き締めるタナト。どうやら大事な話はここからの様だ。

「だから問題だったのは君だよ。エルト」

「俺？」

「あの日、あの時、君が僕に声を掛けてくれた日、僕はあの日もダンジョンにダラダラと入っていく解放軍の奴らを嫌悪感一杯で見送った後だった。そんな僕のやさぐれた心に声を掛けてくれたのが君だったんだ」

「・・・」

「君は決して純粹じゃなかった。自分の冒険心、自分の可能性。そんな物を試したいっていう打算で動く小賢しい少年だった」

「悪かったな」

「けどね。そんな君だからこそ僕には眩しかった。解放軍の奴らなんかを毎日見せられていた僕にとって君は本当に眩しかったんだ」

「・・・」

「だから、あの後少しだけ後悔したんだ」

「俺、何かしたっけ？」

「君じゃないよ。問題は僕。基本的に僕はこの世界の管理者だ。そ

の意味で言えば僕自身にどんな姿を取らせようが自由自在なのだけ
ど、あの時は偶々君と同年代の少年の姿だった。だからこそ君は僕
に声を掛けてくれた訳だから文句を言う筋合いでもないのだけど折
角なら僕は少女の姿で君と出会いたかった」

「お前・・・」

「勘違いしないでくれよ。僕はこんな姿をとっちゃいるが性別は無
いに等しいんだ。だから君に合わせて君に相応しいパートナーとな
りたいと思うのは自然な事だろう？」

「だ、駄目だからね！エルトは渡さないんだから」

「ここに同じく勘違いしたアリサがタナトから俺を護ろうと必死に
なっている。」

「うん。そうだね。だからこそ僕はアリサを君に紹介したんだよ」
「？」

俺もアリサもタナトの言っている意味が分からなくて当惑する。

「少し考えてみてくれよ。例えば君達二人が同時期にエクストラウ
エポンを入手する確率ってどのくらいさ？」

「それは、だって、本当に偶然に・・・」

「だから偶然じゃないんだよ。君達が手に入れるように管理人口知
能である僕が誘導したんだ」

「あゝ」

言われてみればその通り。偶然と言われるよりもタナトが意図し
たと言われる方が自然だ。

「それと同時に君達二人が地下室の掃除をしている間にバグが発生
して二人で閉じ込められる確率は？」

「え？」

「君達が偶然50層にあるイベントクエストを引き当てる可能性は
？」

「・・・」

「そう。全て僕が意図して君達を惹き合わせる為に細工したのさ」

「何でそんな事を・・・？」

アリサは疑問を口にしたが俺はなんとなくタナトの言いたい事が分かってきて自分でも自覚できるくらい血の気が失せていく。

「流石エルト。僕の言いたい事が分かってきたみたいだね」

「お、お前・・・本当にそこまでして」

「どういう事？どういう事なの？」

本当はアリサも気付き始めているのだろう。アリサの顔色も俺と一緒に青くなり始めていた。

「それじゃ最後の問題だ」

そして。

「人工知能である僕に幼馴染なんて本当に居ると思う？」

致命的なその問い。

「ま・・・さか」

「そうだよ。君の役目はエルトに愛される事。君はその為だけに作られた僕の分身だ」

「・・・」

「エルトと夫婦になれた時、君は途轍もなく幸せだっただろう？エルトと離れ離れになった時、君は途轍もなく憂鬱だっただろう？エルトと復縁出来た時、君は最高に自分が幸せだと思っただろう？」

「・・・」

「僕も幸せだったんだ。僕も憂鬱だったんだ。僕も最高に自分が幸せだと思ったんだ」

「・・・」

「君は僕の感情を抜き出して作られた高度な自律型人工知能だ。君が幸せになれば僕も幸せで、君が不幸になれば僕も不幸なんだよ。だから君がエルトに愛される事を僕も望んでいるんだ」

呆然として言葉もないアリサを無視してタナトは自分の心情を打ち明けて言った。

「感情の整理は後回しにして話を続けるぞ」

俺は震えるアリサを強く抱きしめたままタナトに視線を向けて話しかける。

「お前の話が本当だとして、何故俺やアリサと戦う必要があった？」

「君の今の感情でそれを問うのかい？」

「何？」

「君と離れていた2年間には必要な時間だった。アリサが君により愛されるようになる為には二人には障害が必要だったんだ。今回も同じさ」

「・・・」

「アリサが死んで君が自分がアリサをどれほど思っていたか感じなかったとは言わせないぞ。今、衝撃的な話を聞かされているというのにも関わらずアリサを離そうとしないのは何故だい？」

「ああ。そうだな。俺はアリサを愛している」

「！」

腕の中でアリサが震える。同時に目の前のタナトも嬉しそうなのは複雑だが。

「アリサが今何を感じているのか分かるかい？」

「お前の口からは聞きたくないな」

「ごめんね。言わずに居られないんだ。僕の話聞いて疑心暗鬼になるほど不安に囚われて君に抱かれる事だけでギリギリ保っていたアリサが君の一言で震えるほど幸せなんだ。僕の話なんてどうでも良いと思えるほどに」

タナトの言葉を証明するようにアリサが俺に押しつけた体を摺り寄せてくる。

「君にはずっとアリサを愛して欲しい。それだけが僕が君に求める事だ」

「？」

タナトの言葉に少しだけ疑問が頭を掠める。

「流石に優秀だね。エルト。そう。今の言葉にはもう一つ意味があ

るんだよ」

「どういう意味だ？」

「アリサが僕の分身である高度な人工知能だという事は彼女は例えダンジョンがクリアされても現実世界へは行けないって事だ」

「あ」

「君は元々現実世界への興味が薄い。でも薄いだけじゃ困るんだ。アリサを愛する為に君にはずっと電脳世界に居て貰いたいんだ」

「・・・」

「それを約束してくれるなら僕は君以外の全ての人間を現実世界へ帰還させる事を約束しよう」

「ああ。そう言う話に繋がる訳ね」

「やっと少しだけタナトがアリサと同じ存在なのだと納得できた。

この遠回りで強引な理論展開はアリサとそっくりだ。

「良さ。どうせ俺にとつてアリサなしの世界なんて何の意味もない。アリサが行けないと言うなら俺がアリサの元へ留まるよ」

そう。

「約束しよう。俺はずっとアリサと共に居る。あの誓いの通りに」

「それじゃエルト君は一人でこの世界に残るの？」

「別に一人って訳じゃない。アリサとタナトは当然残る訳だし、タナトがその気になったらもう何人かは分身も作れるみたいだし」

「ふん」

「なんだかちよつと納得出来ない感じ。」

「そりゃ私達は現実世界へ帰還する為にダンジョンを攻略していた訳だけど、なんだかエルト君一人を犠牲にして戻るみたいで後味が悪い。」

「私も残っちゃおうかなあ」

「ああ。それは止めた方が良い」

「何で？」

「タナトが許容出来てもアリサが許容しない」

「ああ」

まあ、確かに今のアリサさんじゃ私が残るなんて言ったら暗殺でも平気でやってきそうだ。エルト君を一人占めする為ならなんでも出来るほど彼女のエルト君への愛情は大きくなりすぎている。

実際、今こうしてエルト君を会話しているのがバレたら一体どうなる事やら。

「最後に一つ聞いて良いか？」

「ん？何？」

「何で『エルト君』なんだ？」

「ああ。だって私21だよ？」

「・・・え？」

物凄く失礼な声を上げるエルト君。そりゃ童顔で歳より大分幼く見られますけどね！胸もアリサさんみたくありませんけどね！

「エルト君。年上のお姉さんを怒らせるのはいけない事なのよ？」

「え？ああ。その・・・すみません」

今更敬語で謝って来るのが更にむかつく。

そんな訳で約束の日が来た。

広場に電脳世界の住人数万人が集まってタナト団長の作る現実世界へ帰還する為の名前の難しい変換装置？を通って行くらしい。

「気を付けるよ。向こうは多分こっちより環境的に苛酷らしいから」

「当日になってそんな聞きたくない情報教えられても」

見送りに来てくれたエルト君には悪いけど、もう少し普通に御別れの挨拶が欲しかった。

私がそんな複雑な思いに囚われていると気の早い人はドンドン現実世界への回帰を開始してしまっている。

よくもまあ、あんなに素直に飛び込める事。

事情がある程度知っている私としてはタナト団長を疑ってしまう

気持ちも少なくない。

それに多分、本当はここに残りたいと言う人も少なからずいた筈なのに皆何の疑問も無く現実世界へ帰る為に集まった事実が不気味だ。

「洗脳でもしたのかな？」

「いや。個人通知でもうすぐ電腦世界が崩壊するって情報流したんだ。ここに居たら100%死にますって情報」

「・・・詐欺過ぎる」

そりや確かに皆喜んで行きますよ。誰だって死にたくない訳だし。本当に大丈夫なのかな？」

「さあ。現実世界の現状を把握しているのはタナトだけだし、そのタナトは俺に都合の良い情報しか出して来ないし。そうなると思ったと勝負しないだろう」

「はあ。最後くらい気持ち良く送り出して欲しかった」

「ああ。そう言う事なら一つ」

「？」

「お前の事、嫌いじゃ無かったぞ」

「・・・」

この人はこういうタイミングでそう言う事言ってくるし。

「どうせなら結構好きだったとか言ってくれよ」

「アリサに殺される覚悟があるなら言っても良いけど」

「・・・遠慮しておきます」

今のアリサさんだと洒落にならない。

そうこう話している内に大分人数も少なくなってきた。

「本当にもう戻って来れないのかな？」

「ああ。こつちから現実世界へ変換する装置はあるけど、現実世界からこつちへ来る為の装置はもう失われているからな。タナトの本体も地中深くにあるって話だし少なくともお前が生きている限りで

戻ってくるのは不可能だな」

「そっか」

本音を言うなら名残惜しい。

生まれてこの方21年。ずっと過ごして居た生まれ故郷を永遠にさよならしなくてはいけないのは哀愁を感じる。

「・・・」

気がつけば広場にはもう私とエルト君、そしてアリサさんとタナト団長しか残っていないかった。

「それじゃ私行くね」

「ああ。元気だな」

ありきたりの挨拶をくれるエルト君。どうせなら最後の最後まで爆弾発言で締めくくっても良いかもしれぬ。

「私、君の事凄く好きだったよ」

そうして私は愛しき電腦世界を後にした。

「タナト、あの子の出現位置を高度1000メートルに設定しなさい」

「おいおい」

「やりたいのは山々だけど出現位置は初期設定で指定してしまったからね。今から変更は難しそうだ」

「やりたいのかよ!？」

思わず突っ込みを連発してしまう俺。おかしい。俺ってこんなキヤラだったか？

「それよりエルトは本当に良かったのかい？」

「ん？」

「この装置の作動は時間指定で作動する。あと30秒ほどだが僕や

アリサの意思では装置の作動を止める事は出来ない。今、君が飛び込めば僕達には君を止めるすべはないよ?」

「嘘付け」

計算高いタナトがそんな迂闊な事をするものか。それに本当に飛び込めば現実世界へいくとしても。

「アリサを置いて行くくらいなら、ここで一緒に朽ちていく方がマシだ」

「ふふふ。アリサ、必死に顔に出さないようにしているけど沸騰しそうなほど喜んでるね」

「いや。滅茶苦茶顔に出てるけど」

最近のアリサは本当に感情表現が豊かだ。隠そうという努力の後は見られるけど隠し切れていない。

「ちなみに言うと現実世界では200年の間に人間に代わる新しい支配者が生まれていて、今更彼らが現実世界に帰還なんてしたら絶対戦争になるだろうね」

「うおい!?!」

タナトの新しい爆弾発言に更に突っ込みを入れる。

「どうする?」

「ま。健闘を祈るしかないな」

そうして俺は帰還装置が停止して動作を止めるのを静かに眺めた。

エピソード（後書き）

本当ならサブ主人公のエリシア用にEXウエポン『海王槍』トライデント、Mode・セイレーンを考えていたのですが出番がありませんでした。

第二巻の予定は今のところ未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576o/>

電脳世界のPとV

2010年10月18日00時55分発行